

こ き ぱる  
小木原遺跡群

わらび  
蕨地区 (C・D地区)

く み ざこ  
久見迫B地区

じ めし ぱる  
地主原地区

原田・上江遺跡群

ろく ぶ いち  
六部市遺跡

くら もと  
藏元遺跡

ちゅう まん  
中満遺跡

法光寺遺跡 I・II

上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 II

1996

こ き ぱる  
小木原遺跡群

わらび  
蕨地区 (C・D地区)

く み ざこ  
久見迫B地区

じ ぬし ぱる  
地主原地区

原田・上江遺跡群

ろく ぶ いち  
六都市遺跡

くら もと  
藏元遺跡

ちゅう まん  
中満遺跡

法光寺遺跡 I・II

上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 II

1996

宮崎県えびの市教育委員会

## 序 文

えびの市は、日向・薩摩・大隅の分岐点にあたり、古くから様々な文化が交流した地域です。現在は九州縦貫自動車道も開通し、南九州の要となっております。

市内中央を西流する川内川の氾濫原よりも高位にある段丘面のほとんどは周知の遺跡となっており、遺跡の宝庫ともいえる地域です。

昭和60年度、上江・池島地区180haを対象とする県営圃場整備事業が着工しました。対象地域は全面が周知の遺跡となっていることから関係機関との協議や事前の試掘調査を重ね、保存が困難な地区については、数次にわたって発掘調査を実施してきました。昭和61年度に調査した永田原遺跡と昭和62年度に調査した小木原遺跡群蕨A B地区と口ノ坪遺跡については、すでに『発掘調査報告書Ⅰ』として本報告が刊行されております。

本書は、昭和63年度に調査した蕨C D・久見迫・地主原地区、平成2年度の六部市遺跡、平成4年度の蕨元・中満・法光寺遺跡、さらには平成5年度の法光寺遺跡（第2次）の調査報告書であり、総まとめでもあります。縄文時代から近代に至るまで、様々な遺構や遺物が出土しており、上江・池島地区的台地の開発の歴史が明らかになりましたが、本書が学術資料としてだけでなく、社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

末筆ながら、調査にあたって御指導・御協力いただいた諸先生方および県文化課の方々、調査終了後の整理作業から原稿執筆まで御協力いただいた県文化課の方々ならびに調査に対して御理解・御協力いただいた工事関係者・地元の方々、発掘作業および整理作業に従事していただいた方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

えびの市教育委員会

教育長 平 田 郁 郎

## 例　　言

1. 本書は、上江・池島地区県営闇場整備事業に伴う小木原遺跡群蘇地区、久見迫B地区、地主原地区、六部市遺跡、蔵元遺跡、中満遺跡、法光寺遺跡（1・2次）の発掘調査報告書である。

2. 事業は西諸県農林振興局の委託を受けて、えびの市教育委員会が主体となり、県文化課の協力を得た。

3. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

はじめに……………中野　和浩

小木原遺跡群 蔵・久見迫B・地主原地区……………同 上

原田・上江遺跡群 六部市遺跡……………東　憲章（県文化課）

原田・上江遺跡群 蔵元・中満・法光寺遺跡 I ……戸高真知子（県文化課）

原田・上江遺跡群 法光寺遺跡 II……………中野　和浩

4. 小木原遺跡群においては、土壤分析を宮崎県総合農業試験場の有村玄洋氏に、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部の藤原宏志教授に委託し、それぞれの玉稿をいただいているので加えて報告する。

5. 出土遺物および関連資料は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。

6. 本書の編集は中野が行なったが、遺構の略号や表現方法・文体などは統一していない。

## 総 目 次

はじめに.....	1
遺跡の位置と歴史的環境.....	2
小木原遺跡群の調査.....	11
小木原遺跡群C地区.....	11
小木原遺跡群D地区.....	31
小木原遺跡群久見迫B地区.....	32
小木原遺跡群地主原A地区.....	43
小木原遺跡群地主原B地区.....	43
小木原遺跡群の土壤調査.....	155
小木原遺跡群におけるプラント・オパール分析.....	157
原田・上江遺跡群 六部市遺跡.....	163
原田・上江遺跡群 蔵元遺跡.....	217
原田・上江遺跡群 法光寺遺跡 I .....	248
原田・上江遺跡群 中満遺跡.....	276
原田・上江遺跡群 法光寺遺跡 II .....	319

## I. はじめに

### 1. 調査の経緯

上江・池島地区県営開拓整備事業は総面積が180haに及び、しかも全城が周知の遺跡である。事業は昭和59年度に着手し、平成7年度に完了である。

昭和61年度には永山原遺跡を、昭和62年度には小木原遺跡群落地区（A・B地区）と口ノ坪遺跡を発掘調査し、その結果は『調査報告書1』として刊行されている。

昭和63年度以降も事前の発掘調査が必要となるのは必ずあり、年度ごとに西諸県農林振興局・県文化課・県土地改良連合会・上江土地改良・市耕地課および市教育委員会で埋蔵文化財の保護について協議を行ない、県文化課による試掘調査結果と事業計画図とを照合し、発掘調査が必要となる区域を決めて実施した。

各遺跡の調査期間は以下のとおりである。

蘇・久見追B・地主原地区

昭和63年8月9日から平成元年2月2日まで

六部市遺跡

平成2年12月4日から平成3年2月8日まで

蘇元・中尚・法光寺遺跡I

平成4年11月15日から平成5年3月11日まで

法光寺遺跡II

平成5年11月11日から12月8日まで

### 2. 調査組織

#### 特別調査員

鹿児島大学教授 上村俊雄（昭和63年度）

宮崎大学教授 藤原宏志（昭和63年度）

県総合農業試験場 有村玄洋（昭和63年度）

佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二（昭和63・平成4年度）

#### 調査主体 えびの市教育委員会

教育長 平田敏正（昭和63年・平成2年度）

平田郁郎（平成4年度～）

社会教育課長 萩原利典（昭和63年度）

上別府文夫（平成2年度）

外園秀雄（平成4・5年度）

藤嶋 勉（平成5年度～）

課長補佐 上別府文夫（昭和63年度）

野間寛俊（平成2年度）

境田 貢（平成4年度）

馬越脇泰二（平成5年度～）

社会教育係長 浜松政弘（昭和63年度）

境田 貢（平成2年度）

松田輝久（平成4年度）

上加世田たず子（平成5年度）

木村政一（平成7年度）

主事・事務 白川良一（昭和63年度）

上加世田たず子（平成2～5年度）

赤崎由美（平成4年度～）

調査員 中野和浩（昭和63年度～）

#### 調査員

宮崎県教育文化課主事 東 憲章（平成2年度）

同 上 戸高真知子（平成4年度）

同 上 吉本正典（平成5年度）

#### 調査協力

九州大学文学部 助手 西健一郎

宮崎県教育文化課 係長 面高哲郎

同 上 主任主事 永友良典

なお調査にあたり、工事関係者や、亀岡耕作氏（土地改良理事長）をはじめとする上江地区の地元の方々には多大な御援助・御協力を賜り、調査が円滑に進んだ。

### 3. 遺跡の位置と歴史的環境 (第1図)

本書に報告する遺跡群は、本市の盆地中央を西流する川内川とその支流の池島川に挟まれた広大な低位段丘(原田・上江遺跡群(2)として周知)の西半部に位置する。

#### 旧石器時代

遺構は発見されていないが、妙見遺跡<sup>[1]</sup>でナイフ形石器12点、剥片尖頭器1点、台形石器1点、三稜尖頭器1点、細石刃核4点、細石刃13点が、八幡丘遺跡<sup>[38]</sup>でナイフ形石器1点が出土している。

遺跡としては、標高280m以上の高位面に立地していると思われる。

#### 縄文時代

周知の遺跡ほとんどで遺物が発見されているが、大まかな傾向としては高位段丘に早期、中位段丘に前期～中期、低位段丘に後期、最低位段丘に晩期の遺跡が多い。

早期の調査例は少なく、妙見遺跡で集石遺構が13基、二本杉遺跡<sup>[4]</sup>では22基検出された。また、八幡丘の切り通しには数期の集石遺構が露出している。

後期に入ると遺跡が増大する。役所遺跡<sup>[77]</sup>では大型土坑と後期中頃～晩期にかけての土器片が8万点余り出土している。上田代遺跡<sup>[エ]</sup>では9軒の竪穴式住居などのほか、中期末～晩期前半の土器片が4万点余り出土

している。

晩期の桑田遺跡<sup>[50]</sup>からは突蒂文土器を伴う溝状遺構や土坑が検出され、プラント・オパールも発見された。弥生時代

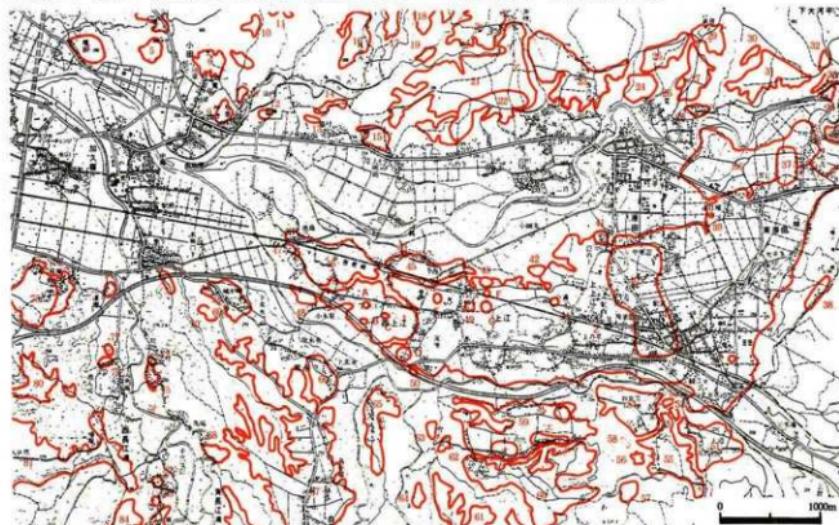
前～中期の遺物は稀少である。後期の遺跡は年々増加し、広畠遺跡<sup>[21]</sup>の北東部と南東部、永田原遺跡<sup>[46]</sup>、二本杉遺跡、本地原遺跡<sup>[イ]</sup>、松山遺跡<sup>[ウ]</sup>では花弁状住居が検出されている。

#### 古墳時代

現在、高位段丘面でのみ竪穴式住居が発見されており、妙見遺跡では41軒、馬場田遺跡<sup>[83]</sup>で10数軒、内丸遺跡<sup>[11]</sup>で3軒、園田城跡<sup>[22]</sup>で2軒、上田代遺跡で17軒を数える。

水捌けの良い洪積世砂礫段丘には板石積石室墓や地下式横穴墓群が営まれる。これらは島内・灰塚<sup>[75]</sup>・小木原<sup>[3]</sup>、遠目塚<sup>[39]</sup>、建山<sup>[40]</sup>、芋畠<sup>[22]</sup>、杉水流<sup>[37]</sup>の7地域に数基～数10基単位で群集する。なお、上田代遺跡では小型のもの1基が発見された。

小木原では、昭和62年度の蕨地区的調査において、木蓋土壤墓52基、木棺墓6基、板石積石室墓8基、横口式土壤墓7基、地下式横穴墓60基余りが確認されている。島内と建山には復元推定直径23mの墳丘があり、首長墓の規模の画一性を推定させる。



遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)

奈良時代

市内で最も稀薄した時期（氾濫原に降りているのか）<sup>註</sup>で、天神免遺跡で須恵器の骨蔵器 2 点が、妙見原遺跡の遺物包含層から数点の遺物が出土しているにすぎない。

平安時代

広大な台地（段丘面）の開発が始まり、台地中央部付近に居住して周辺で畑作（陸稻も含む）を営むか、最低位段丘に居住して谷や氾濫原で水稲耕作を営んでいたと思われ、小路ノ下遺跡（78）や小木原遺跡群、水田原遺跡、田代地区遺跡群（59）などで集落跡が発見されている。

昌明寺遺跡の調査では、集落端縁の旧谷から墨書土器146点（うち33点は黒色土器）や越州窯系青磁、木器・木製品（椀・皿・箸・櫛・曲物・下駄・鋤・鎌・柄・奈り物）なども出土し、南九州では注目される。

<sup>(34)</sup> 法光寺跡(49)は10世紀前半頃廃絶した寺跡で、布目瓦を有する。軒瓦はまだ発見されていない。

中世

人口増加、耕作地の拡大に伴って集落も台地縁辺部に移動していく。台地では計画的な直線の水路や畦畔が築かれる。肥沃な氾濫原も含めた盆地一帯は領土争奪戦的となり、市内の丘陵突端部33ヶ所に山城が築かれる。

<sup>(3)</sup> 園田城跡(3)は、唯一発掘調査を実施しているが、平安時代の集落と重複しているため、郭内の構造を復元するのが困難である。

近世以降

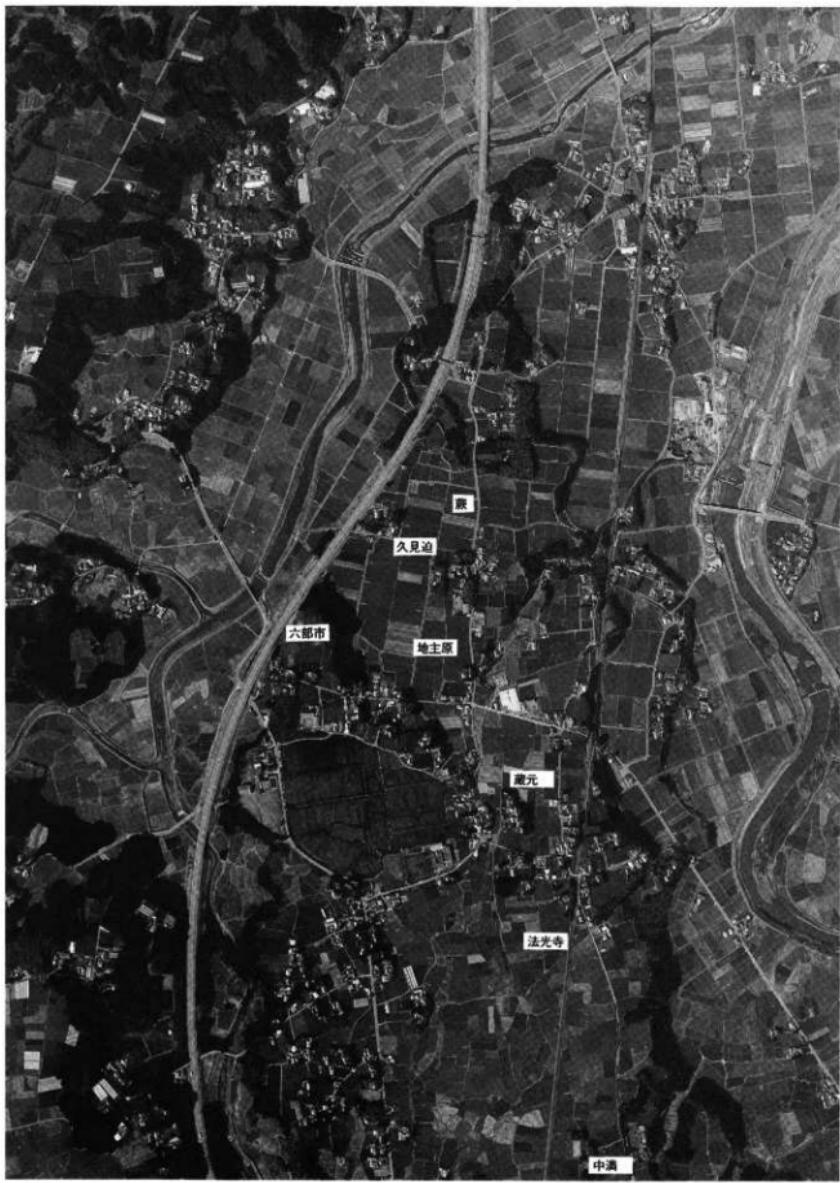
島津氏支配の後は、増え耕地が拡大されるとともに、整備が繰り返される。集落は台地の様か山裾へと移動し、最大限の可耕地を生み出す。

集落において欠かせない井戸は、本市においては近代に至るまで登場しない。豊富な湧水に恵まれているからである。

三

- (1) 宮崎県教育委員会「野人遺跡、原生遺跡・妙見遺跡」1994  
(2) 「えびの市史 上巻」えびの市 1984  
(3) (1) と同じ  
(4) 平成6年度調査、木報告  
(5) えびの市教育委員会「長瀬地区遺跡群 狩所田、小路ノ下遺跡」1995  
(6) 同 同 「田代地区遺跡群 上田代遺跡」1994  
(7) 小野和也「宮崎県人の市南遺跡」日本考古学年報65号 日本考古学会1992  
(8) 宮崎県教育委員会「本地遺跡」1994  
(9) えびの市教育委員会「田代地区遺跡群 上田代、松山、竹之内遺跡」1995  
(10) 同 同 「長瀬地区遺跡群 内丸、糸井大、馬場田遺跡」1992  
(11) 同上  
(12) 平成3年度調査、木報告、(2)に所収  
(13) 平成6・7年度で47基を調査。照里2・青1、鈴行削8~9号が多數出土  
(14) (2) 所収  
(15) えびの市教育委員会「佐世遺跡」1991  
(16) 永良真典「小木原遺跡群地区」『玉川所遺跡、小木原遺跡群発掘』、ロハ所編  
『』1990 えびの市教育委員会  
(17) えびの市教育委員会「妙見原遺跡」1996  
(21) (5) と同じ  
(22) 平成7年度調査、木報告  
(23) 10~13世紀位のもので、年代決定が困難  
(24) えびの市教育委員会「えびの市遺跡群詳細分類調査報告書」1985  
(25) (2) と同じ

番号	通 路 名	時代	上・中・道 標	記
1	小木原下式横穴墓	绳文～世紀	石室石棺墓は付	
2	吉良城	古墳～近世	下山八幡宮	
3	久足見 B地区	绳文～近世	牛頭山古墳	
4	C地区	中世～近代	桂川	
5	原町	绳文～近代	原町	
6	六郷部	绳文～近世	穴吹矢造萬	
7	葛城	中世～近世	穴吹矢	
8	F 大字牛野町 I	平安～中世	中野社	中野社
9	G 大字牛野町 II	平安～中世	牛野・道跡	
10	H 小鹿野町	中世～近世	村谷	
11	I 岩出町	绳文～平安	羽ノ瀬、瀬戸路	
12	J 丸尾遺跡	绳文～平安	御所原	
13	K 呼土上遺跡	绳文～平安	佐野地	
14	L 加久屋遺跡	中世	御所原	
15	M 畠原	中世	山城	
16	N 山道遺跡	平安	山城	
17	O 小城	绳文～中世	山城	
18	P 阿須	平安～中世	山城	
19	城内 A 地區	绳文～古墳	御所原地	
20	平城	中世	山城	（山城）
21	古之越	中世	山城	
22	大名古北越遺跡	古墳	佐野地	
23	越ヶ連	古墳	佐野地	
24	合谷原遺跡	古墳	佐野地	
25	山神原遺跡	古墳	佐野地	
26	余光城跡	中世	牛頭山古墳	
27	安治郡跡	古墳	佐野地	
28	作庭遺跡	古墳	佐野地	
29	小豆遺跡	古墳	佐野地	
30	就合市 1 号跡	古墳	佐野地	
31	就合市 2 号跡	古墳	佐野地	
32	牛山遺跡	古墳	佐野地	
33	久保原遺跡	古墳	佐野地	
34	半生田遺跡	古墳	佐野地	
35	小吹遺跡	古墳	佐野地	
36	木曾丸遺跡	古墳	佐野地	
37	松木原下式横穴墓	古墳	地主式横穴	
38	八幡丘遺跡	古墳	地主式横穴	
39	遠日原下式横穴墓	古墳	地主式横穴	
40	鹿山古式横穴墓	古墳	地主式横穴	
41	田之上城	中生	山城	
42	古城	中生	山城	
43	上川城	中生	山城	
44	多賀社（之宮）	平安	河原町	
45	口ノ河原町	平安	高	
46	水田原町	平安～中世	高	
47	木崎原・御戻路	中世	人見塚原ほか	
48	鳥居越城跡	中世	山城	
49	波光寺跡	平安	西ノ谷社	
50	鶴岡遺跡	中世	佐野山古墳	
51	大迫原遺跡	古墳	佐野山古墳	
52	大江原 2 号跡	古墳	佐野山	
53	人道原 3 号跡	古墳	佐野地	
54	妙見原遺跡	古墳	佐野山	
55	石高下跡	古墳	佐野地	
56	田原原遺跡	古墳	佐野地	
57	丸木原遺跡	古墳	佐野地	
58	牛頭山跡	中世	佐野地	
59	田代山跡	中世	佐野地	
60	大宮山跡	中世	佐野地	
61	鶴原山古墳	古墳	佐野地	
62	後追跡	古墳	佐野地	
63	月川跡	古墳	佐野地	
64	鴻洋跡	古墳	佐野地	
65	山田山跡	古墳	佐野地	
66	村ノ山跡	古墳	佐野地	
67	野野原 1 号跡	古墳	佐野地	
68	佐野山跡	古墳	佐野地	
69	井原 1 号跡	古墳	佐野地	
70	堀ノ木山跡	古墳	佐野地	
71	堀尾城跡	古墳	佐野地	
72	小鹿野城跡	古墳	佐野地	
73	鶴田越跡	古墳	佐野地	
74	鶴原城跡	古墳	佐野地	
75	庵原山下式横穴墓	古墳	佐野地	
76	鬼塚原跡	古墳	佐野地	
77	夜田山跡	古墳	佐野地	
78	小郡ノ上山跡	古墳	佐野地	
79	長牛山跡	古墳	佐野地	
80	中原跡	古墳	佐野地	
81	本道跡	古墳	佐野地	
82	分財天跡	古墳	佐野地	
83	馬場田山跡	古墳	佐野地	
84	日向原跡	古墳	佐野地	
85	二木井跡	古墳	佐野地	
86	伊奈原跡	古墳	佐野地	
87	伊奈原・佐野	古墳	佐野地	
88	山道原跡	古墳	佐野地	
89	佐野山跡	古墳	佐野地	
90	佐野山跡	古墳	佐野地	
91	中・近世	山城	佐野地	
92	近世	山城	佐野地	
93	古墳石室墓は付			古墳石室墓は付
94	中世	山城		
95	山城			
96	平安～平成	古墳		
97	中世	古墳		
98	10世紀	古墳		
99	近世	古墳		
100	近世	古墳		
101	近世	古墳		
102	近世	古墳		
103	近世	古墳		
104	近世	古墳		
105	近世	古墳		
106	近世	古墳		
107	近世	古墳		
108	近世	古墳		
109	近世	古墳		
110	近世	古墳		
111	近世	古墳		
112	近世	古墳		
113	近世	古墳		
114	近世	古墳		
115	近世	古墳		
116	近世	古墳		
117	近世	古墳		
118	近世	古墳		
119	近世	古墳		
120	近世	古墳		
121	近世	古墳		
122	近世	古墳		
123	近世	古墳		
124	近世	古墳		
125	近世	古墳		
126	近世	古墳		
127	近世	古墳		
128	近世	古墳		
129	近世	古墳		
130	近世	古墳		
131	近世	古墳		
132	近世	古墳		
133	近世	古墳		
134	近世	古墳		
135	近世	古墳		
136	近世	古墳		
137	近世	古墳		
138	近世	古墳		
139	近世	古墳		
140	近世	古墳		
141	近世	古墳		
142	近世	古墳		
143	近世	古墳		
144	近世	古墳		
145	近世	古墳		
146	近世	古墳		
147	近世	古墳		
148	近世	古墳		
149	近世	古墳		
150	近世	古墳		
151	近世	古墳		
152	近世	古墳		
153	近世	古墳		
154	近世	古墳		
155	近世	古墳		
156	近世	古墳		
157	近世	古墳		
158	近世	古墳		
159	近世	古墳		
160	近世	古墳		
161	近世	古墳		
162	近世	古墳		
163	近世	古墳		
164	近世	古墳		
165	近世	古墳		
166	近世	古墳		
167	近世	古墳		
168	近世	古墳		
169	近世	古墳		
170	近世	古墳		
171	近世	古墳		
172	近世	古墳		
173	近世	古墳		
174	近世	古墳		
175	近世	古墳		
176	近世	古墳		
177	近世	古墳		
178	近世	古墳		
179	近世	古墳		
180	近世	古墳		
181	近世	古墳		
182	近世	古墳		
183	近世	古墳		
184	近世	古墳		
185	近世	古墳		
186	近世	古墳		
187	近世	古墳		
188	近世	古墳		
189	近世	古墳		
190	近世	古墳		
191	近世	古墳		
192	近世	古墳		
193	近世	古墳		
194	近世	古墳		
195	近世	古墳		
196	近世	古墳		
197	近世	古墳		
198	近世	古墳		
199	近世	古墳		
200	近世	古墳		
201	近世	古墳		
202	近世	古墳		
203	近世	古墳		
204	近世	古墳		
205	近世	古墳		
206	近世	古墳		
207	近世	古墳		
208	近世	古墳		
209	近世	古墳		
210	近世	古墳		
211	近世	古墳		
212	近世	古墳		
213	近世	古墳		
214	近世	古墳		
215	近世	古墳		
216	近世	古墳		
217	近世	古墳		
218	近世	古墳		
219	近世	古墳		
220	近世	古墳		
221	近世	古墳		
222	近世	古墳		
223	近世	古墳		
224	近世	古墳		
225	近世	古墳		
226	近世	古墳		
227	近世	古墳		
228	近世	古墳		
229	近世	古墳		
230	近世	古墳		
231	近世	古墳		
232	近世	古墳		
233	近世	古墳		
234	近世	古墳		
235	近世	古墳		
236	近世	古墳		
237	近世	古墳		
238	近世	古墳		
239	近世	古墳		
240	近世	古墳		
241	近世	古墳		
242	近世	古墳		
243	近世	古墳		
244	近世	古墳		
245	近世	古墳		
246	近世	古墳		
247	近世	古墳		
248	近世	古墳		
249	近世	古墳		
250	近世	古墳		
251	近世	古墳		
252	近世	古墳		
253	近世	古墳		
254	近世	古墳		
255	近世	古墳		
256	近世	古墳		
257	近世	古墳		
258	近世	古墳		
259	近世	古墳		
260	近世	古墳		
261	近世	古墳		
262	近世	古墳		
263	近世	古墳		
264	近世	古墳		
265	近世	古墳		
266	近世	古墳		
267	近世	古墳		
268	近世	古墳		
269	近世	古墳		
270	近世	古墳		
271	近世	古墳		
272	近世	古墳		
273	近世	古墳		
274	近世	古墳		
275	近世	古墳		
276	近世	古墳		
277	近世	古墳		
278	近世	古墳		
279	近世	古墳		
280	近世	古墳		
281	近世	古墳		
282	近世	古墳		
283	近世	古墳		
284	近世	古墳		
285	近世	古墳		
286	近世	古墳		
287	近世	古墳		
288	近世	古墳		
289	近世	古墳		
290	近世	古墳		
291	近世	古墳		
292	近世	古墳		
293	近世	古墳		
294	近世	古墳		
295	近世	古墳		
296	近世	古墳		
297	近世	古墳		
298	近世	古墳		
299	近世	古墳		
300	近世	古墳		
301	近世	古墳		
302	近世	古墳		
303	近世	古墳		
304	近世	古墳		
305	近世	古墳		
306	近世	古墳		
307	近世	古墳		
308	近世	古墳		
309	近世	古墳		
310	近世	古墳		
311	近世	古墳		
312	近世	古墳		
313	近世	古墳		
314	近世	古墳		
315	近世	古墳		
316	近世	古墳		
317	近世	古墳		
318	近世	古墳		
319	近世	古墳		
320	近世	古墳		
321	近世	古墳		
322	近世	古墳		
323	近世	古墳		
324	近世	古墳		
325	近世	古墳		
326	近世	古墳		
327	近世	古墳		
328	近世	古墳		
329	近世			



遺跡周辺の航空写真

小木原遺跡群

## 蕨地区 (C・D地区)

## 久見迫B地区

## 地主原地区

小木原遺跡調査報告書

(C・D地区) 図版図

久見迫B地区

主生原遺跡

凡　例

1. 本編で使用している遺構番号は、昭和62年度調査区との継続にしている。
2. 地下式横穴墓については、概要報告では蕨C地区と久見迫B地区を区別せずに通番で番号を付けた（S T - 3001～3035）が、本報告では、蕨C地区には S T - 3001～3022、久見迫B地区には S T - 4001～4013と改変している。
3. 溝状遺構（SD - 21～64）と土墳墓（SK - 101～111）については、概報どおりである。

## 目 次

I.はじめに.....	11
II. 試掘調査.....	11
III. 発掘調査	
1. 試掘溝C 1 拡張区.....	11
2. 試掘溝D 1 拡張区.....	11
3. 蔵C地区.....	12
4. 蔵D地区.....	31
5. 久見追B地区.....	32
6. 地主原A地区.....	43
7. 地主原B地区.....	43
IV.まとめ.....	83

## 插 図

## 目 次

第1図 試掘溝および発掘坑位置図	13~14
第2図 試掘溝A 拡張区 S D-21層序図	16
第3図 試掘溝C 1 拡張区遺構実測図	17~18
第4図 試掘溝D 1 拡張区遺構・西壁層序図	19~20
第5図 試掘溝D 1 拡張区 S K-103実測図	21
第6図 試掘溝C 1 拡張区・D 1 拡張区出土遺物 実測図	22
第7図 蔵C地区遺構分布図	23
第8図 蔵C-0区東半~1区遺構分布図	24
第9図 蔵C-2区遺構分布図	25
第10図 蔵C-1区東壁層序実測図	26
第11図 蔵C-2区東壁層序実測図	27
第12図 S T-3007 遺構実測図	28
第13図 S T-3008 遺構実測図	28
第14図 S T-3009 遺構実測図	29
第15図 S T-3010 遺構実測図	30
第16図 S T-3011 遺構実測図	31
第17図 S T-3012 遺構実測図	31
第18図 S T-3013 遺構実測図	32
第19図 S T-3014 遺構実測図	33
第20図 S T-3015 遺構実測図	34
第21図 S T-3016 遺構実測図	35
第22図 S T-3017 遺構実測図	36
第23図 S T-3018 遺構実測図	37
第24図 S T-3019 遺構実測図	38
第25図 S T-3020 遺構実測図	39
第26図 S T-3022 遺構実測図	40
第27図 S D-43 遺構実測図	41
第28図 蔵地区出土土器器実測図	41
第29図 蔵C地区地下式横穴墓出土遺物実測図	42
第30図 蔵D地区遺構分布図	44
第31図 S D-61 層序図	44
第32図 久見迫B地区遺構分布図	45~46
第33図 久見迫B-4区南壁層序図	47
第34図 S T-4001 遺構実測図	48
第35図 S T-4002 遺構実測図	49
第36図 S T-4003 遺構実測図	50
第37図 S T-4004 遺構実測図	51
第38図 S T-4005 遺構実測図	52
第39図 S T-4006 遺構実測図	53
第40図 S T-4007 遺構実測図	54
第41図 S T-4008 遺構実測図	55
第42図 S T-4009 遺構実測図	56
第43図 S T-4011 遺構実測図	57
第44図 S T-4012 遺構実測図	58
第45図 S T-4013 遺構実測図	59
第46図 地下式横穴墓出土遺物実測図(1)	60
第47図 地下式横穴墓出土遺物実測図(2)	61
第48図 地下式横穴墓出土遺物実測図(3)	62
第49図 地下式横穴墓出土遺物実測図(4)	63
第50図 地下式横穴墓出土刀劍実測図	64
第51図 S K-110 遺構実測図	65
第52図 S K107・110出土遺物実測図	65
第53図 S K-104 遺構実測図	66
第54図 S K-104 出土遺物実測図	66
第55図 S T-4011西側土器群実測図	66
第56図 S Z-11 遺構実測図	67
第57図 S Z-13 遺構実測図	68
第58図 地主原A地区遺構分布図	69
第59図 S A-01 遺構実測図	70
第60図 久見迫B地区出土土器器・土製品実測図	71
第61図 調査区出土中世国產陶器実測図	72
第62図 調査区出土輸入陶磁器実測図(1)	73
第63図 調査区出土輸入陶磁器実測図(2)	74
第64図 調査区出土須恵器実測図	74
第65図 調査区出土国產陶磁器実測図(1)	75
第66図 調査区出土国產陶磁器実測図(2)	76
第67図 調査区出土国產陶磁器実測図(3)	77
第68図 試掘溝K 1・久見迫B地区出土砥石実測図	78
第69図 久見迫B地区出土石加工品・石臼実測図	79
第70図 久見迫B地区出土繩文土器実測図	80
第71図 久見迫B地区出土弥生土器実測図	80
第72図 久見迫B地区出土金属製品実測図	80
第73図 地主原A地区出土土器実測図	80
第74図 地主原A地区金属製品実測図	80
第75図 地主原A地区出土石器実測図	80
第76図 調査区検出溝状遺構分布図	81~82

## 図版目次

- 図版1 試掘溝A拡張区SD-24, SD-24断面、試掘溝C2全景、試掘溝F1全景、試掘溝D1プラント・オペラル分析資料採取、土壤分析資料採取、蔵C-2区プラント・オペラル分析資料採取
- 図版2 試掘溝C-1拡張区全景、西南部遺物出土状態、SB-01-PP-1断面・PP-3断面
- 図版3 試掘溝D1拡張区全景、SD-34全景
- 図版4 SD-34西壁断面層序、SK-103断面層序・アカシヤ堆出土状態・完掘状態
- 図版5 蔵C-1~2区全景、蔵C-2区東壁SD-21断面層序
- 図版6 蔵C-2区南部遺構分布状態、ST-3020と周辺の構造状態
- 図版7 蔵C-0区遺構分布状態、蔵C-3区遺構検出状態
- 図版8 蔵C-2区東壁北部断面層序、東壁中央部断面層序、東壁南端部断面層序
- 図版9 ST-3007全景、断面層序
- 図版10 ST-3008堅坑とSD-41、堅坑断面、廻門部人骨出土状態
- 図版11 ST-3009全景、ST-3013堅坑完掘状態
- 図版12 ST-3010全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版13 ST-3012堅坑上部と排水の断面層序、排水の分布状態
- 図版14 ST-3014全景、ST-3015堅坑上部閉塞状態・完掘状態、堅坑西側の排水断面層序
- 図版15 ST-3016全景、堅坑上部閉塞状態、遺物出土状態
- 図版16 ST-3017全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版17 ST-3018堅坑上部閉塞状態・全景、ST-3022全景
- 図版18 ST-3019全景、ST-3019と中世の構造遺構
- 図版19 ST-3020全景、堅坑上部閉塞状態と陥没坑
- 図版20 蔵D地区遺構分布状態、III区SD-61層序
- 図版21 久見追B-1区遺構分布状態
- 図版22 久見追B-4区遺構分布状態、B-2~4区遺構分布状態
- 図版23 久見追B-4区南壁層序
- 図版24 ST-4001と風倒木柱、断面層序、遺物出土状態
- 図版25 ST-4002全景、廻門閉塞状態
- 図版26 ST-4003全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版27 ST-4004全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態、玄室左奥遺物出土状態、玄室右前遺物・人骨出土状態
- 図版28 ST-4005全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態、遺物出土状態
- 図版29 ST-4006全景、廻門閉塞状態、遺物出土状態、ST-4007堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版30 ST-4008全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態、遺物出土状態
- 図版31 ST-4009全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版32 ST-4009全景、ST-4010玄室埋土、玄室
- 図版33 ST-4011全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版34 ST-4012全景、堅坑断面層序、廻門閉塞状態
- 図版35 ST-4013廻門閉塞状態、ST-4011と周辺の遺物出土状態
- 図版36 SK-104断面、全景、SK-107全景、SK-108-109全景
- 図版37 SK-110断面層序、全景
- 図版38 SZ-04断面層序、SZ-09断面層序、SZ-10断面層序、SZ-15全景
- 図版39 SZ-11全景、西端部遺物出土状態、土壤分析の状況
- 図版40 SZ-13とST-4006、断面層序、SZ-13上層断面層序
- 図版41 地主原A地区全景、SB-01, PP-243, PP-309-310断面
- 図版42 地主原A地区全景、SD-01・SZ-04、小学生の体験学習
- 図版43 地主原B地区全景、構造遺構北壁層序
- 図版44 試掘溝C1拡張区西側土器群、蔵C地区出土須恵器、中世国産陶器
- 図版45 試掘溝A拡張区SD-24出土唐津焼徳利、蔵C地区SD-41出土常滑焼甕、ST-3016堅坑埋土出土近世陶器、久見追B地区SK-104出土土器、久見追B地区出土繩文土器、弥生土器
- 図版46 久見追B地区出土須恵器、ST-4011堅坑西側土器群土器、須恵器
- 図版47 ST-4012堅坑埋土出土土器、SZ-10出土墨書き土器、久見追B地区出土中世国産陶器焼前焼窯跡
- 図版48 久見追B地区SZ-11出土土器、中世国産陶器、SZ-13出土近世国産陶磁器
- 図版49 調査区出土14~15世紀の輸入陶磁器青磁、15~16世紀の輸入陶磁器青磁、16世紀の輸入陶磁器染付
- 図版50 久見追B地区出土16世紀末~17世紀前半の国産陶磁器、17世紀の国産陶磁器、試掘溝I1出土17世紀の德利
- 図版51 久見追B地区出土17世紀の国産陶磁器、17世紀後半~18世紀前半の国産陶磁器、18世紀の国産陶磁器、18世紀後半~19世紀の国産陶磁器
- 図版52 久見追B地区出土18世紀後半~19世紀後半の国産陶器、磁器、19世紀の国産陶磁器、SZ-11出土国産陶器、陶器
- 図版53 地主原A地区出土輸入陶磁器青磁、17世紀~18世紀前半の国産陶磁器、18世紀以降の国産陶磁器、18~19世紀の国産陶器
- 図版54 地主原A地区出土19世紀後半の国産陶器、SA-01出土磁器碗、ガラス瓶、久見追B地区出土砥石、軽石加工品
- 図版55 ST-3009・3013・3014・3016・3020出土遺物
- 図版56 ST-3018・4001出土遺物
- 図版57 ST-4002・4003・4004出土遺物
- 図版58 ST-4005・4006出土遺物
- 図版59 ST-4008・4010・4011出土遺物
- 図版60 地下式横穴墓出土、刀劍、久見追B地区SK-107出土遺物、SK-110出土遺物
- 図版61 久見追B地区中世以降の遺構出土鐵製品、地主原A地区出土鐵製品

## 表 目 次

表1	試掘溝C 1 挖張区・D 1 挖張区出土弥生土器・土師器觀察表	22
表2	蕨C 地区地下式横穴墓一覽表	84
表3	久見迫B 地区地下式横穴墓一覽表	84
表4	蕨C 地区地下式横穴墓出土遺物一覽表	84
表5	久見迫B 地区地下式横穴墓出土遺物一覽表	85
表6	S T - 4011西側上器群 觀察表	86
表7	S K - 104出土遺物一覽表	86
表8	調査区出土須恵器觀察表	86
表9	調査区出土中世国産陶器觀察表	86
表10	久見迫B 地区出土上部器觀察表	87
表11	調査区出土輸入陶磁器觀察表	88
表12	調査区出土国産陶磁器觀察表（1）	89
表13	調査区出土国産陶磁器觀察表（2）	90
表14	試掘溝K 1・久見迫B 地区川土砾石一覽	90
表15	久見迫B 地区出土輝石加工品・石臼一覽	91
表16	久見迫B 地区出土金属製品一覽	91
表17	地主原A 地区出土遺物一覽	91

# 小木原遺跡群の調査

## I. はじめに

昭和63年度圃場整備事業は、本市大字上江字蕨・久見迫・地主原・宮原地内300,000m<sup>2</sup>に計画された。当該地域は小木原地下式横穴墓群の分布域であり、昭和62年度蕨地区の調査において古墳時代の墳墓群を検出しているため、関係機関と協議を重ね、試掘調査と本調査を繰り返して実施した。

試掘調査には、昭和63年8月9日～13日、9月7日～10月6日、さらには同月21日～11月1日を充て、本調査を9月29日～10月20日および11月14日～平成元年2月2日に実施した。出土遺物の整理作業は3月31日まで継続し、平成5年4月22日～8月31日、平成6年10月7日～同月19日、平成7年1月5日～3月31日、7月3日～10月13日にかけて実施し、一連の作業を完了した。

## II. 試掘調査

### 1. はじめに

調査は休耕地に限られたが、微高地のC～D付近とJ付近を中心に設けた（第1図）。

### 2. 基本的層序

層序は上からI層：表土（耕作土）、II層：床土・客土、III層：黒灰～黒色土（火山灰）、IV層：黄～黄褐色微砂質土（アカホヤ火山灰）、V層：暗茶褐色ハードローム（黒灰色土が斑状に混入）、VI層：暗灰～淡黑色土（火山灰）、VII層：淡黄褐色～淡茶褐色土、VIII層：砂疊層に分別した。

VII層は約15,000年前の段丘堆積物で、約4mの厚さがある。下層にはシラス（入戸火砕流）が堆積している。市内の低・中位段丘は上記の基本的層序を形成している。

VIII層は数10m単位で凹凸を繰り返し、浅い谷が幾筋も入っている。以後Ⅸ層までは均一した厚さで堆積するため、自然と微高地が出来上がる。古代・中世には、この微高地を居住地としている。

### 3. 試掘溝の調査（図版1）

試掘溝A 溝状遺構を確認したため、重機で拡張した。その結果、重複する東西方向の溝（SD-24）と南北方向の溝（SD-21～23）を検出した。SD-21は幅11.6m、深さ0.9mを測り、埋土から土師器の細片が1点出土している。SD-24は現在の用水路とほぼ並行す

る、幅1～2mの水路で、埋没後、幅・深さ50cmの水路が掘削されている。埋土から、近世末～近代の陶磁器が出土している（第2図、65図-1.2）

試掘溝B～E 中世の土器片や柱穴・溝状遺構を検出した。

試掘溝F 直径25～35cmの柱穴約20基を検出した。埋土から、須恵器片と土師器片が若干出土している。

試掘溝G・I・J 近世～近代の遺物を含む多数の柱穴や溝を検出した。

試掘溝H すでに天井が陥没した地下式横穴墓（S T-4011）と、その玄室部に重複する円形の上壇墓を検出、堅杭の西側では須恵器と土師器の破片がみられた。詳細は、久見迫B地区の中で記述する。

## III. 発掘調査

### 1. 試掘溝C 1拡張区（第3・6図、図版2）

施工上削平される部分において、調査を実施した。

I・II層を剝ぐと、東半分はIV層が露出した。遺構面は西に傾斜し、溝状遺構6条と土坑3基、掘立柱建物跡1棟、柱穴50基余りを検出した。SD-26は幅50～80cm、深さ20cm内外の溝で、17世紀代の陶磁器が出土している。当溝の80cm南には、並行する溝SD-27が走り、畦畔と水路を構成している。SD-30と25は東西に彎曲する溝で、15～16世紀を想定している。SB-01は2間×3間（4.3×6.4m）の建物である。柱穴の直径は40cm内外であるが、深さは一様ではない。年代決定できる遺物は出土していないが、13～14世紀と思われる。

調査区の西側のIII層内には、弥生中期～中世の遺物が散在していた。調査区の西側にも当該期の遺構が埋蔵している可能性がある。

### 2. 試掘溝D 1拡張区（第4～6図、図版3）

試掘溝C 1拡張区の南側、試掘溝D 1周辺を拡張した調査区で、前者とは様相が異なる。柱穴は皆無で、土坑2基と溝状遺構4条を検出した。

SK-103は、長軸1.40m、短軸1.03m、深さ0.60mで椭円形を呈し、底面にはアカホヤ塊があるものの、出土遺物は無い。構造的には木蓋上壇墓と思われる（第5図）。

溝状遺構は、すべて砂が大量に流れ込んでおり、充分に機能している。SD-31・34は直線的で、特に後者は幅2.1m、深さ0.94mの大溝で、土師器や陶器・鉄器などが出土した。SD-32・33はこれ以前に掘削された溝で、彎

曲していることから、旧地形もしくは旧地割に沿っているものと思われる。

### 3. 藤C地区

昭和62年度に発掘調査した藤A・B地区とは県道を挟んでいるだけであり、西南から延びてくる谷までは墳墓群が存在すると考え、1~3区に小区分して表土剥ぎを行なった。その際、5~6基の地下式横穴墓の玄室が、重機の重みによって陥没した。その他の墳墓は、すでに天井が陥没して黒土上で充填していた。

調査は、施工による削平深度によって、1区を全面調査、2区は地下式横穴墓のはか必要最低限とし、3区は重機による天井の破壊の有無を確認することとした。なお0区は、調査終了間近に県文化課の指導を受けて拡張調査（分布の確認のみ）をした地区である。

検出した遺構は、地式横穴墓22基+ $\alpha$ 、溝状遺構20条+ $\alpha$ 、土坑4基、pit約10基を検出した。

#### 古墳時代の遺構と遺物

調査区では地下式横穴墓22基（ST-3001~3022）を検出したが、+20基程度の未確認墓があったと思っている。うち1区においては完全な分布状況を把握している。

#### ST-3001~3006（図版7）

未調査であるが、堅坑の規模と形態で構造が推定できる。ST-3003と3004は羨門閉塞のタイプで、墳丘を共有していたと思われる。残りの4基は堅坑上部閉塞のタイプであると思われる。

#### ST-3007（第12図、図版9）

検出時は、玄室内天井が崩落して黒色土が埋まっている状況であった。実際は玄室内埋土を除去していく中、天井が崩落した状況ではなく、黒色系の土だけが埋まっていた。当初追葬坑と考えていた堅坑の1・2層も、玄室が埋まって後の掘り込みであり、且つ、青磁片が1点出土していた。羨門部西側には、閉塞材をはめ込むためと考えられる掘り込みがある。堅坑は不整長方形で、2段掘り、短辺に羨門があり、長さ1.54m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。羨道は幅0.3m、玄室は台形で、奥行き1.26m、奥壁の幅1.18m、羨門側の幅1.66mを測る。

#### ST-3008（第13図、図版10）

玄室は県道下にあり、未調査である。堅坑は、不整形で南半部は溝状遺構（SD-41）に削られている。2層には大量の礫と陶磁器片が混入していた。羨門には閉塞材が見られず、板閉塞と思われる。

#### ST-3009（第14図、図版11）

堅坑上部閉塞の平入り橢円形タイプである。堅坑の北側から玄室にかけて崩落し、閉塞石は全て落ち込んでいた。堅坑底面の幅は0.37m、玄室の奥行きは1.52m、幅1.96mである。玄室の左側に小刀の破片と木質の鞘片（第29図-25, 26）が遺存していた。

#### ST-3010（第15図、図版12）

堅坑は隅丸長方形で、長さ1.64m、幅1.0m、深さ0.85mを測り、短軸に羨門を持つ。玄室は平入り隅丸台形を呈し、奥行きは1.30m、奥壁の幅は1.30m、羨門側の幅は1.80m、最大幅は1.94mを測る。閉塞には、板石3枚を使用している。

断面から判断すると追葬は無い。副葬品も無い。

#### ST-3011（第16図）

玄室は県道下にあることから、堅坑のみの調査となつた。堅坑プランは一辺60cmの方形を呈し、北辺に傾斜が付く。深さは1.10mであり、底面に閉塞石の一部が崩落していた。羨道の中位まで黒色土が流入している。

#### ST-3012（第17図、図版13）

ST-3011の東に位置し、堅坑の南縁と閉塞石を確認した。北壁断面のA層（遺構面の黒色土と堅坑・玄室掘削耕土が混ざった土層）は、幅5mにわたり、遺構面から10~15cm掘り凹めた上に被覆している。このA層によって堅坑の位置は不明瞭となり、埋葬（追葬）終了状況を表していることが推定される。且つ、直径5m・厚さ15cm程度と仮定すると、堅坑・玄室の掘削耕土量と同量になり、墳丘を持つことが許されなかった階級の墳墓かもしれない。

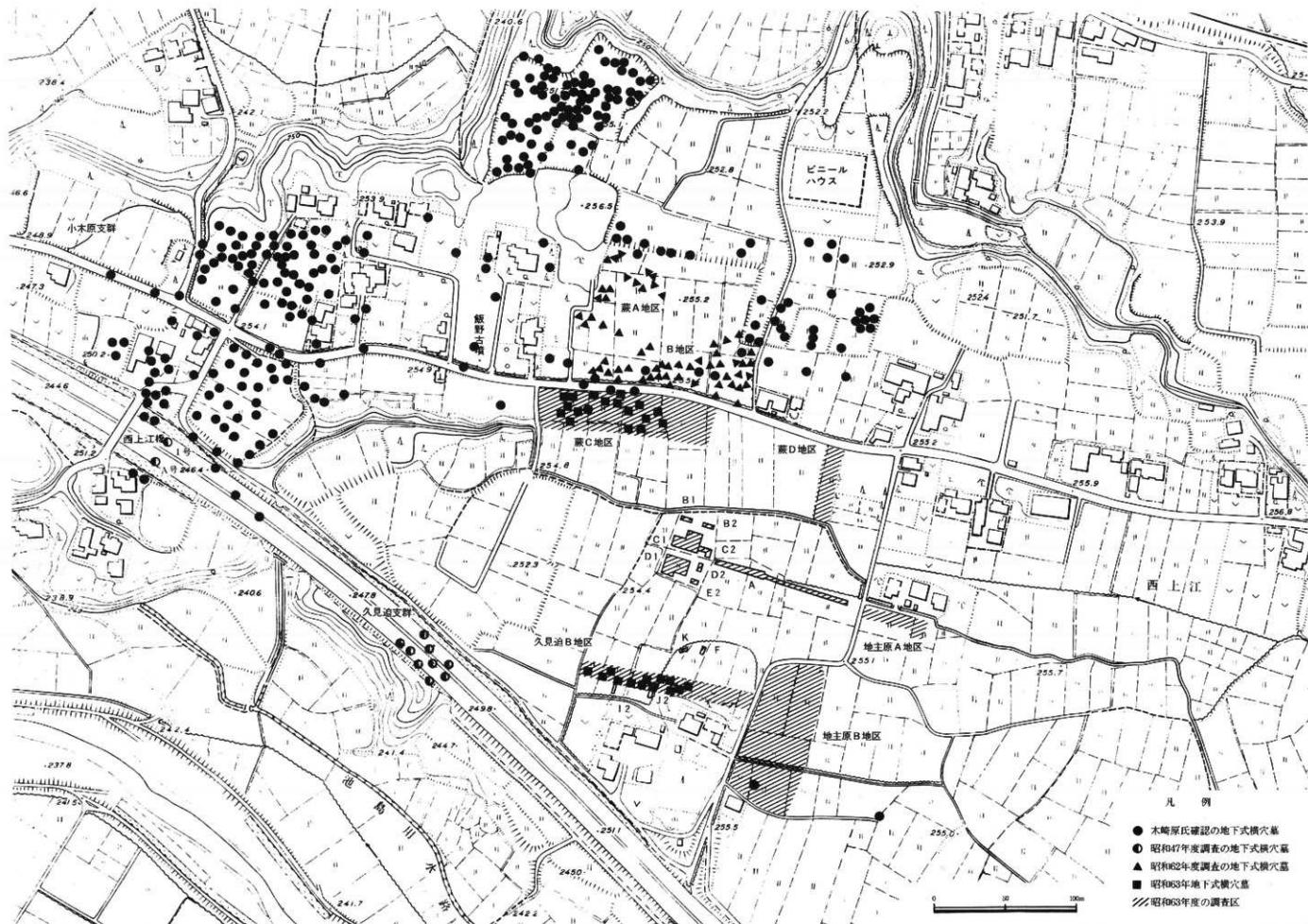
#### ST-3013（第18図、図版11）

主軸が北寄りの、堅坑上部閉塞・平入り橢円形タイプである。堅坑は2段掘りで、2段目は長さ0.58m、幅0.40mの長方形で、深さ1.30mである。羨道は短く、玄室の奥行きは1.20m、幅2.0m、高さ0.80mを測る。

玄室の左奥には、片刃長頭鎌1本と主頭鎌1・刀子1・種類不明1の4点（第29図-1~4）が、中央羨門側には赤色顔料の散布がみられた。

#### ST-3014（第19図、図版14）

羨門から玄室にかけて崩落していた。堅坑上部閉塞・平入り橢円形タイプで、堅坑の1段目と閉塞石は削失していた。堅坑は0.4m四方と小さく、深さは0.90mを測る。玄室の床面は堅坑よりも10cmほど高く、奥行き1.46m、幅2.16mを測る。



第1図 試掘溝および発掘坑位置図 (1:2500)

玄室の奥側には刀1振と長頭鎌7、鏃1が、手前には刀1振と半頭鎌2、脇抉柳葉鎌1がある（第29図-5～16、第50図-129、131）。鎧は、位置的には奥側の一括に含まれる可能性が高い。129は長さ46.8cm、131は70cmである。

#### S T - 3 0 1 5 (第20図、図版14)

主軸が北寄りの、堅坑上部閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は2段掘りで、1段目は1辺1.20mの隅丸方形、2段目は長さ0.60m、幅0.4～0.5mの略長方形を呈し、深さは1.20mである。堅坑上部は、細長い板石3板と拳へ頭大の礫で閉塞している。

玄室は奥行き1.50m、幅2.26m、高さ1.02mを測り、床面は堅坑底面よりも最大0.4m低い。人骨や副葬品は皆無である。なお、西に接する上層觀察用土手で、礫混じりの掘削排土を検出している（第25図）。

#### S T - 3 0 1 6 (第21図、図版15)

羨道から玄室にかけては崩落していた。主軸は北寄り、平入り梢円形タイプである。

堅坑は2段掘りで、1段目は長さ約1.6m、幅1.14mの長方形、2段目は幅0.44mで、深さは1～1.1mを測る。堅坑上部は細長い板石4枚で閉塞されている。

玄室の奥行きは1.20m、幅1.90mを測り、奥壁寄りに被葬者の頭骨と下肢骨、副葬品が遺存していた。副葬品は刀1振のほか鉄鋒1、柳葉鎌1、脇抉柳葉鎌5が一括して頭骨の後方に置いてあった（第29図-17～20、第50図-130）。大刀の現存長は44cmである。

#### S T - 3 0 1 7 (第22図、図版16)

主軸を北東に向かって、羨門閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は長さ1.80m、幅1.05mの隅丸長方形で深さは0.80mを測る。玄室は崩落していた。

羨道から玄室に向かって緩やかに下向し、玄室床面と堅坑底面は0.34mの差がある。羨門は、長軸0.25～0.35mの板石と拳大の礫で閉塞している。

玄室の奥行きは0.97m、幅1.68mを測る。人骨や副葬品は皆無である。

#### S T - 3 0 1 8 (第23図、図版17)

主軸が北寄りの、堅坑上部閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は2段掘りで、1段目の北半部は後世の溝状掘削の際に削平されている。1段目は1辺1.1～1.4mの長方形、2段目は長さ0.5～0.6m、幅0.4mの長方形を呈し、深さは1.18mを測る。堅坑上部は、5枚の板石を花弁状に重ねて中央に拳大の礫を4個置いて閉塞している。

玄室の主軸は堅坑よりも西へ傾き、奥行きは1.14m、幅1.58m、高さ0.72mを測る。天井はドーム型である。右中央部には小剣1振と半頭鎌1、脇抉柳葉鎌1、長頭鎌3が副葬されていた（第29図-21～24）。

#### S T - 3 0 1 9 (第24図、図版18)

主軸が北向きの、堅坑上部閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑1段目を含む上位は後世に削平され、天井崩落以前にすでに半分近くまで土が流入している。現存する堅坑の深さは1.0m、底面の幅は0.54mである。玄室の奥行きは1.20m、幅1.57mを測る。天井は、屋根型に近いドーム型と推定される。

人骨および副葬品は皆無である。

#### S T - 3 0 2 0 (第25図、図版19)

主軸が北東向きの、堅坑上部閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は2段掘りで、1段目は長さ約1.40m、幅1.15mで、2段目は幅0.45m、深さ1.10mである。

羨道から玄室にかけては崩落・埋没し、堅坑の東隅は後世の溝状遺構掘削の際に削失している。堅坑の上部には板石1枚と礫が残っていた。

玄室は羨道よりの一段（10cm）下がり、奥行き1.20m、幅1.90mを測る。人骨は遺存していなかったが、玄室と羨道の境のあたりに刀子1点（第29図-27）が出土した。位置的には、移動している可能性が高い。

#### S T - 3 0 2 1

未掘であるが、位置と形状から地下式横穴墓とした。

#### S T - 3 0 2 2 (第26図、図版17)

2区東壁沿いを調査した際に検出した。

主軸は北寄りで、堅坑上部閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は2段掘りで、1段目は1辺1.2～1.3mの隅丸方形、2段目は幅0.6m、長さ0.8m、深さ1.24mを測る。1段目上半部と閉塞石は削失している。

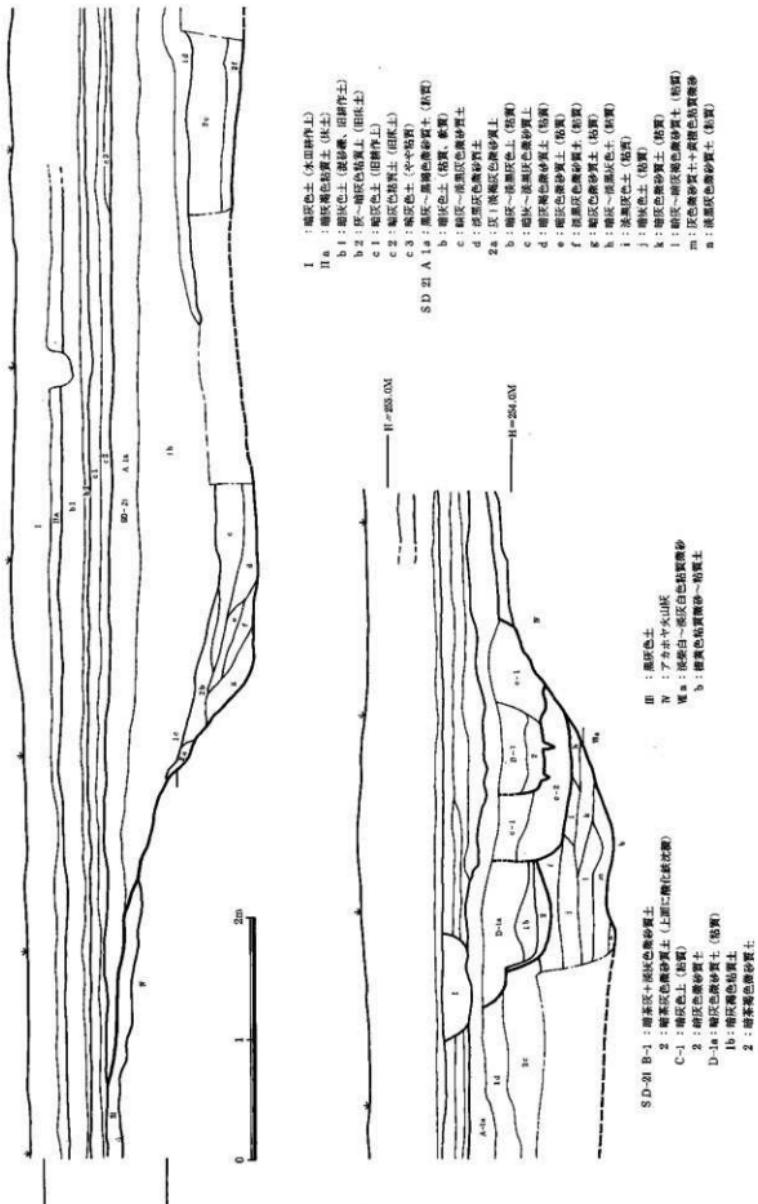
玄室の底面はフラットではなく、大井も凹凸が著しい。奥行きは0.92m、幅1.38m、高さ0.84～0.54mと小型である。人骨および副葬品は皆無である。

#### その他

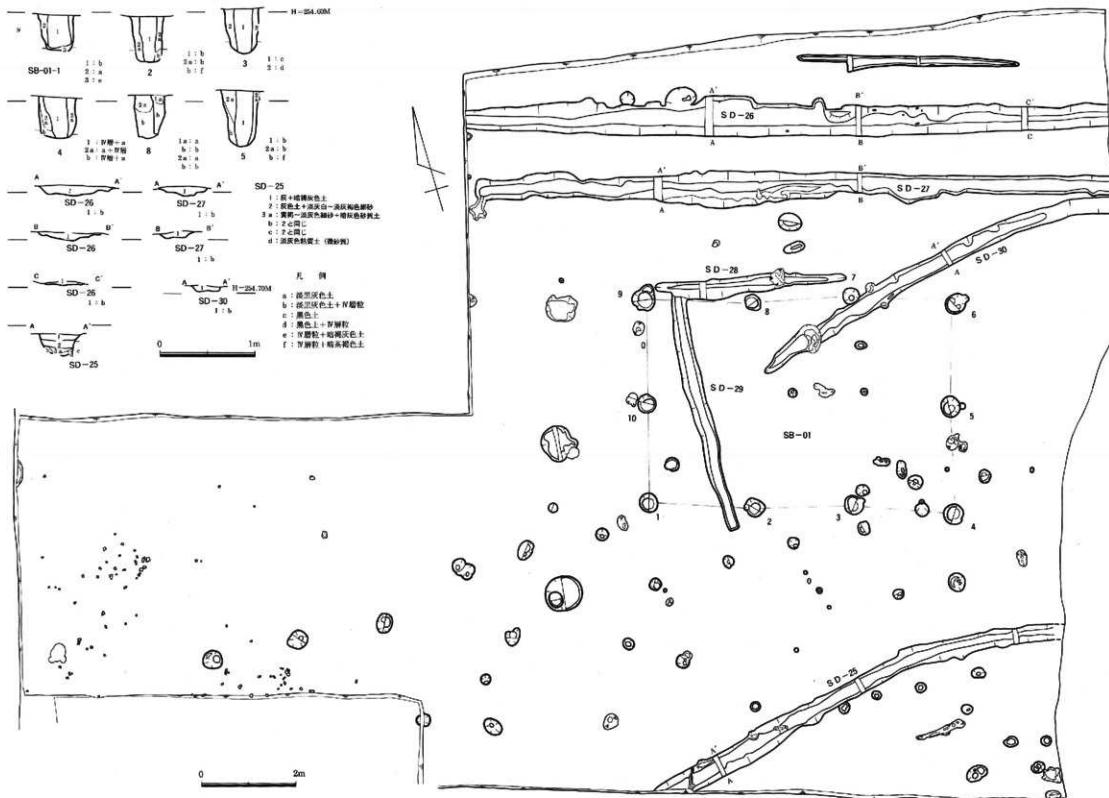
羨C-2区の北壁沿いには礫混じりの黒土が3ヶ所あり（第9図の網目）、S T - 3 0 1 2と同様、この地層を掘り下げれば堅坑が検出できたと思われる。

#### 古代～近世の遺構と遺物

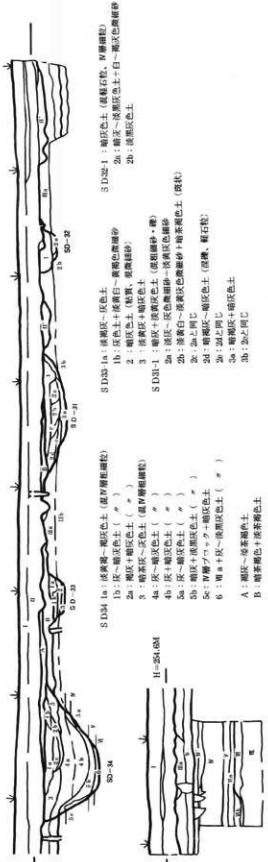
墳墓以外の遺構は、ほとんどが耕地化に伴う溝状遺構である。



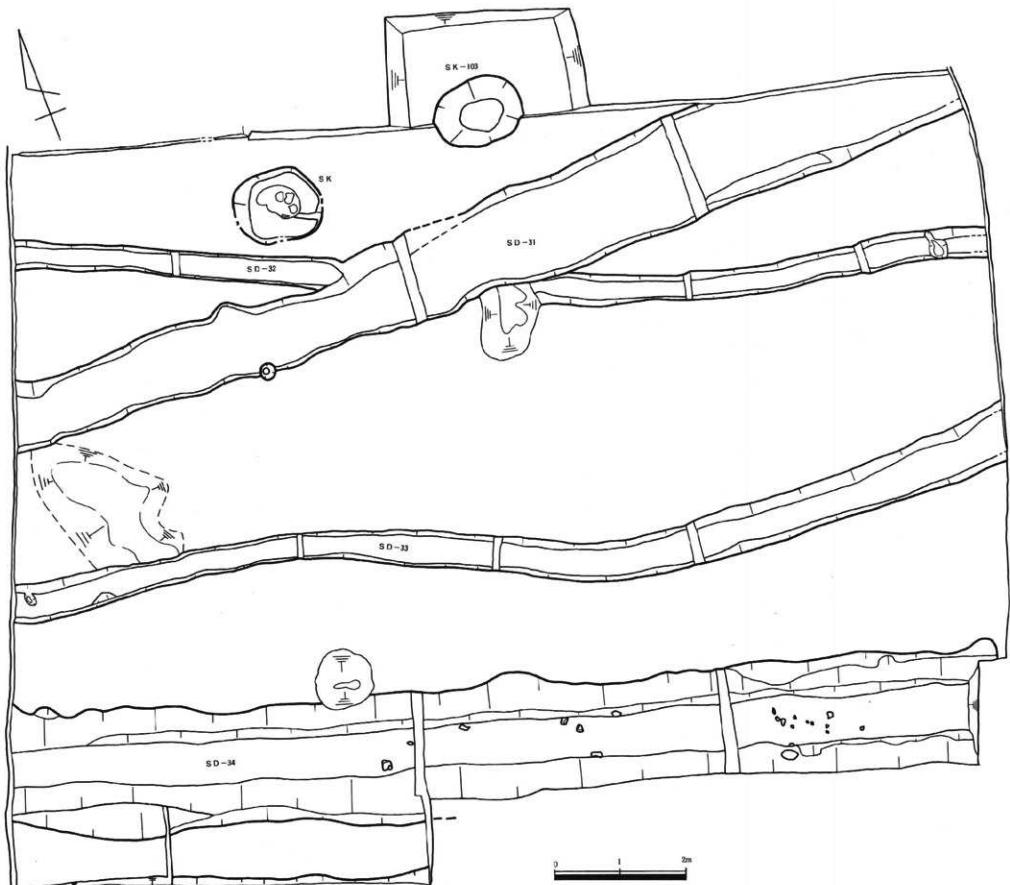
第2図 試掘溝A拡張区SD-21 層序図



第3図 試掘溝C-1拡張区 遺構実測図



第4図 試掘溝D1拡張区 遺構実測図、西壁層序図



調査区の北側には、県道（通称「山麓線」）に沿って1条の溝状遺構（SD-41）を検出した。

直線的ではないものの溝状遺構としたが、幅も広く、機能が異なると思われる。

#### SD-4 1

正確な幅が計測できるのは1区と2区の境、2区と3区の境の土層観察用土手の断面層序図（第10・11図）であるが、状況は異なる。

第10図では、現状では上面の幅は3.60m、深さ0.35～0.40mである。上面は後世の開墾で削られ、原况を復原すると幅4.6m以上となる。底面は幅1.70mを測り、直径5cm前後の礫が全面に敷かれたような状況で、しかも酸化鉄が沈積して、硬化していた。埋土に砂粒は含んでいない。

第11図を見ると、SD-41構築以前に畦畔や溝状遺構が存在する。平安時代～中世にかけて墓域は生産の場へと変わる。先ず畦畔（SR-05）が削り出され、SD-51が掘削された。埋没後、畦畔（SR-04）が築かれ、SR-05との間に溝（SD-49）ができる。

これらが埋没（SR-03）すると、SD-41と50が掘削された（幅4.9m）。SD-50以外の底面には礫が敷かれた状況で、酸化鉄が沈積した硬化面となっている。よってSD-41は石敷道路と推定する。ただ、SD-50の北側は、南側よりも10cmレベルが高く、硬化も弱い。

出土遺物は少ないが、底面から常滑焼の甕（第61図-1）が、上層からは青磁片が出土しており、戦国期の道路であったと推定される。

#### SD-4 3（第27図）

北はSD-41と離がり、南東へ5m延びた所で南に掘折する。幅は一定ではなく0.3m～0.1m、掘折部から北の底面は2列の階段掘りで、石敷道路に向かって徐々に下降している。形状からみると、道路に通じる小路と考えられる。なお、SD-41との切り合いは無いと判断した。出土遺物は皆無である。

#### SZ-0 2（第8図）

1辺が4.6～5.8mの不整長方形で、0.4m程度の掘り込みがある。機能は不明である。

#### SD-4 0（第8図）

2ヶ所で屈折する、幅1.1～3mの溝状遺構で、

10～25cmの凹凸の掘り込みがある。埋土から、土師器の細片が3点出土した。

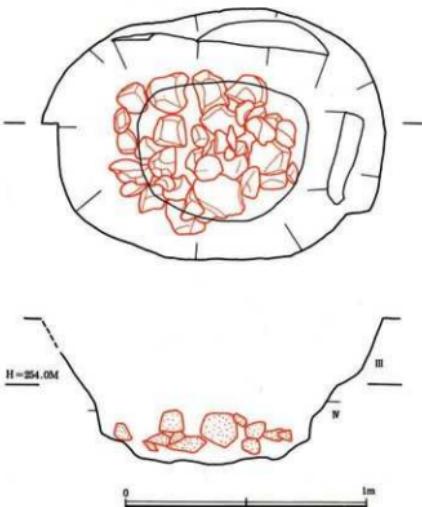
#### SD-3 8（第8図、図版6）

ST-3020を囲む、幅1.6～5m、内径4～7m、外径9～14mの溝である。北東部は直角に張り出し（深さは5～10cm）、その南側は5～10cm低い。西には直径2～3m、深さ0.4mの落ち込みがある。南西部の幅は狭いが深さは0.3m前後である。南側はSD-39と合流する。SD-39は幅1.2～2.6m、深さ0.25mである。

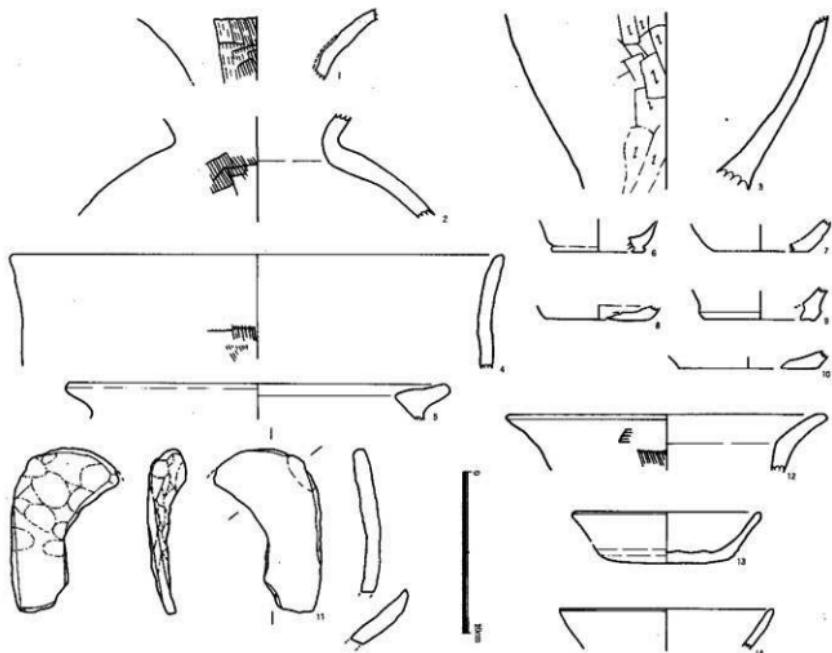
SD-40の埋土から土師器の細片と青磁片（14～15世紀）が、上面から薩摩焼の陶器片3点が出土しており、ST-3020の周溝ではないことは明らかである。

#### SC-2 2区東壁沿い

東壁沿い2mを掘り下げる、埋没遺構が検出された。南端部では落ち込み（SZ-04）と須恵器（第64図-4・6）に加えてブラント・オパールも検出され、平安時代頃からすでに墓域から耕作地へ転化していった様子が伺える。



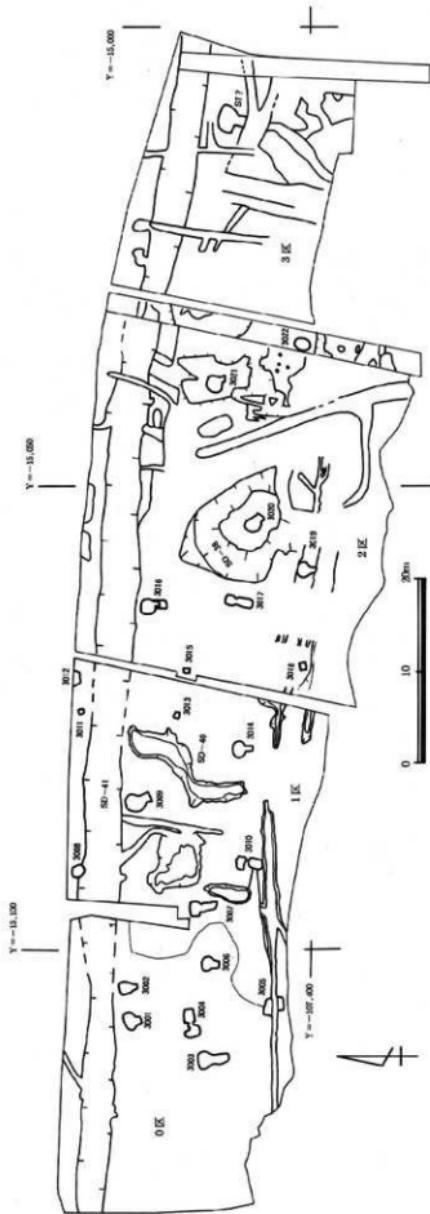
第5図 試掘溝D I 拡張区 SK-103 実測図



第6図 試掘溝C1拡張区・D1拡張区出土 土師器 実測図

表1 試掘溝C1拡張区・D1拡張区出土弥生土器・土師器観察表

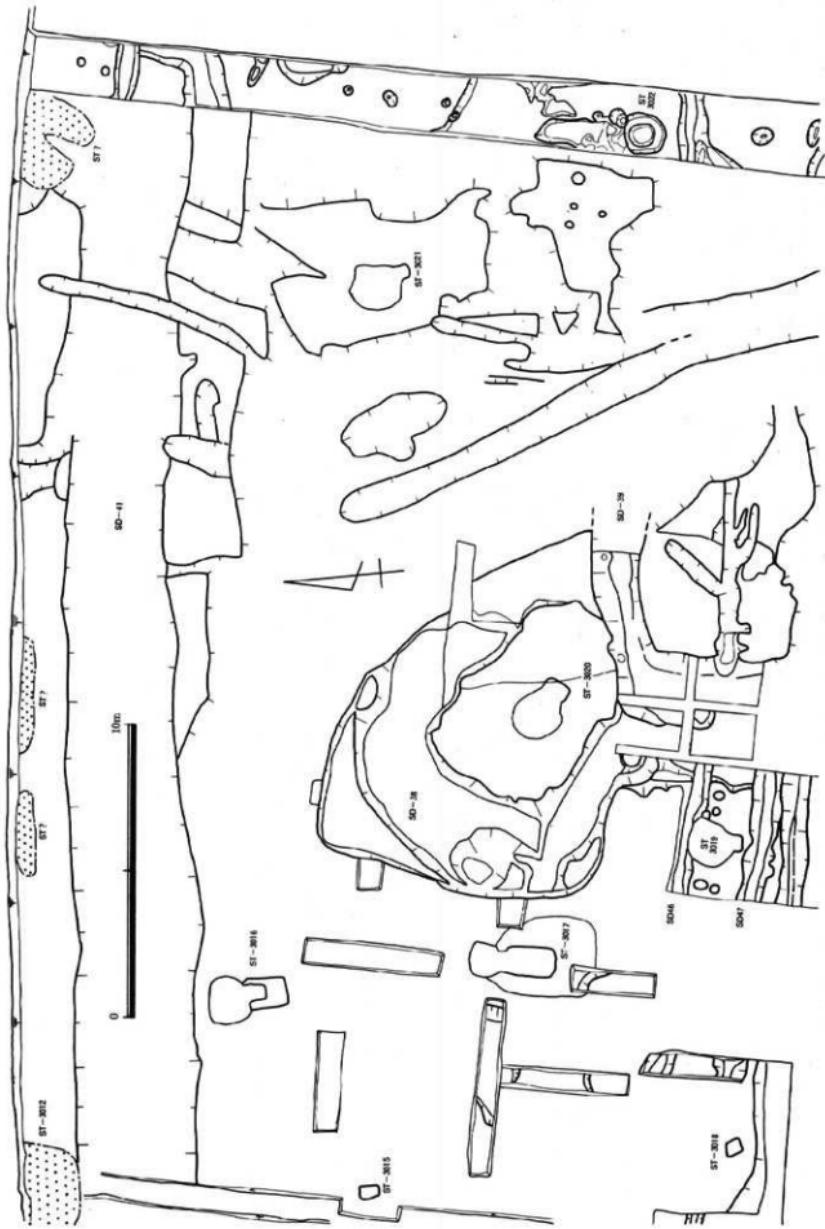
番号	出土地・遺構	等 種	法 直 (cm)		調 整 底			色		調 烷 成		胎 土
			口 径	底 径	高 度	内 面	外 面	底 部	内 面	外 面	烷 成	
第6図 1	C1 土器群	壺	—	—	—	摩 滅	ハケ	—	淡黄褐色	淡茶褐色	良	1~2ミリの砂粒・赤褐色少
2	C1 土器群	壺	—	—	—	ナ デ	ハ ケ	—	淡黄褐色	黄褐色	良	1~2ミリの砂粒 少量
3	C1 土器群	壺	—	—	—	ナ デ	上部カスク 下部ナデ	—	淡茶褐色	淡黄褐色~淡茶褐色	ややあまい	1~2ミリの砂粒 多量
4	C1 上器群	壺	30.2	—	—	ナ デ	ナ テ 削 ハケ	—	淡黄褐色	淡黄褐色	あまい	1ミリ前後の砂粒 多量
5	C1 土器群	壺	11.6	—	—	ナ デ	ナ デ	—	淡黄褐色	淡黄褐色	良	1ミリ前後の砂粒 少量
6	C1 土器群	高台付壺	—	5.8	(1.9)	ナ デ	ナ テ	ヘラ切り	淡黄褐色	淡黄褐色	ややあまい	精 良
7	C1 土器群	壺	—	5.8	—	ナ デ	ナ デ	摩 滅	淡黄褐色	淡灰褐色	ややあまい	精 良
8	C1 土器群	壺	—	6.4	—	ナ デ	ナ デ	糸切り	淡黄褐色	淡黑灰	良	精 良
9	C1 上器群	壺	—	6.8	—	ナ デ	ナ デ	糸切り?	淡黄褐色	淡黄褐色	良	精 良
10	C1 土器群	壺	—	8.6	—	ナ デ	ナ デ	糸切り	淡黄褐色	淡灰	良 好	精 良
11	C1 土器群	上製品	—	—	—	指 頭	指 頭	—	黄褐色	黄褐色~暗黄褐色	良	1ミリ前後の砂粒 多量
12	D1 覆乱坑	壺	19.8	—	—	ナ デ	ヨコハケ ハケ? タテハケ	—	灰~暗灰	淡茶褐色	ややあまい	1ミリ前後の砂粒・雲母 少量
13	D1 SD-34	壺	11.2	7.6	3.2	ナ デ	ナ デ	糸切り	淡黄褐色	淡黄褐色	良	精 良
14	D1 SD-34	壺	13.0	—	—	ナ デ	ナ デ	—	黄褐色	黄褐色	良	1~2ミリの砂粒 微量



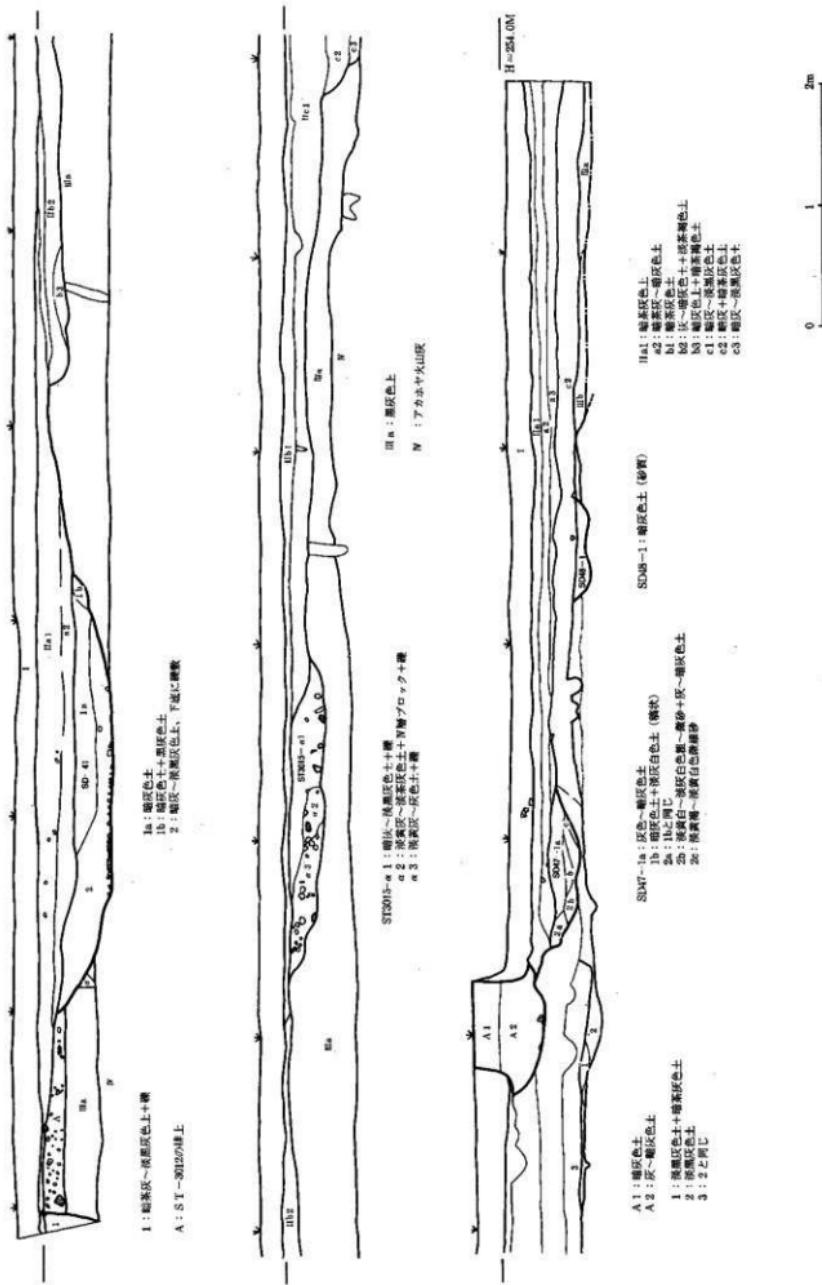
第7図 漢C地区 遺構分布図

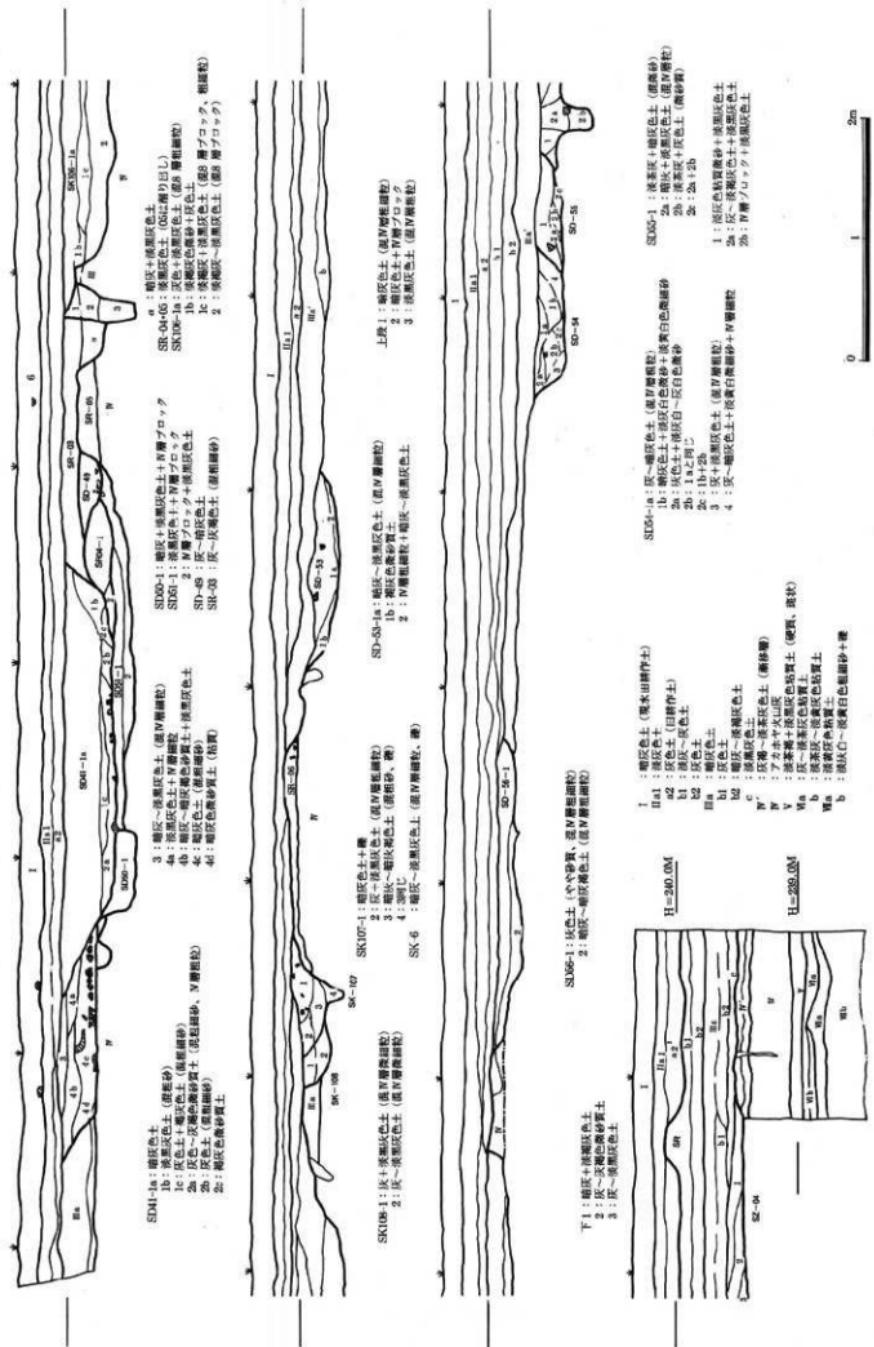
第8図 蔊C-0区東～1区 遺構分布図

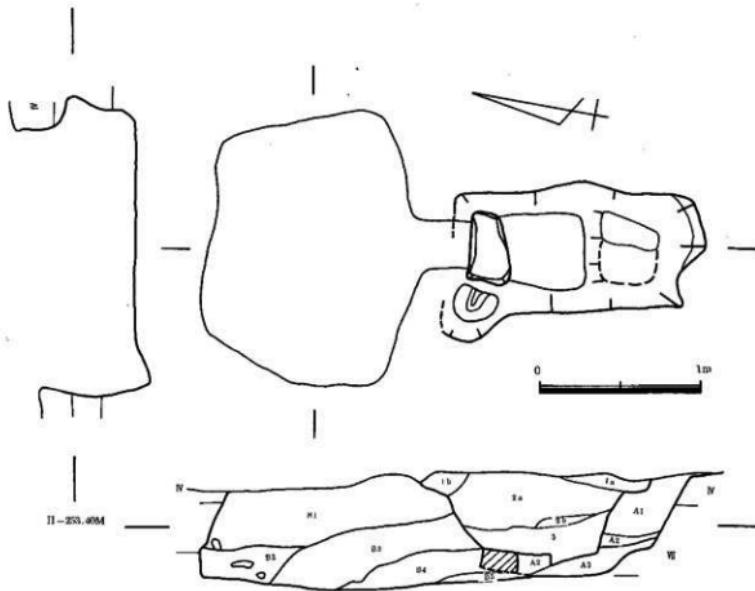




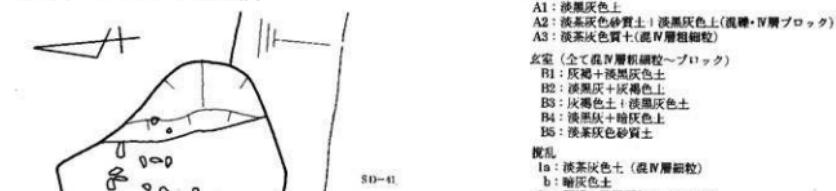
第9図 第C-2区 連構分布図





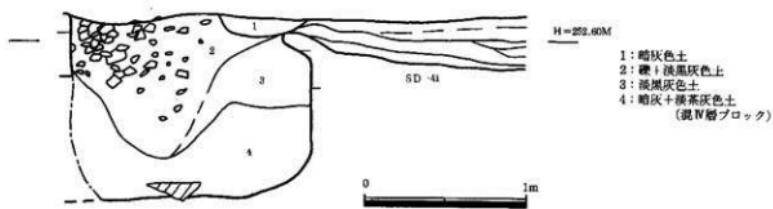


第12図 ST-3007 遺構実測図



堅核  
 A1: 淡黒灰色土  
 A2: 淡茶灰色砂質土 (淡黒灰色土上 (混層・N層ブロック))  
 A3: 淡茶灰色質土 (混N層粗細粒)  
 玄窓 (全て混N層粗粒細粒～ブロック)  
 B1: 灰褐色+淡黒灰色土  
 B2: 淡黒灰+淡褐色土  
 B3: 灰褐色土; 淡黒灰色土  
 B4: 淡黒灰+褐色土  
 B5: 淡茶灰色砂質土

搅乱  
 Ia: 淡茶灰色土 (混N層細粒)  
 b: 粘土土  
 2a: 灰褐色+淡黒灰色土 (混N層)  
 b: 灰褐色土  
 3: 深灰褐色+淡黒灰色土 (混N層)



第13図 ST-3008 遺構実測図

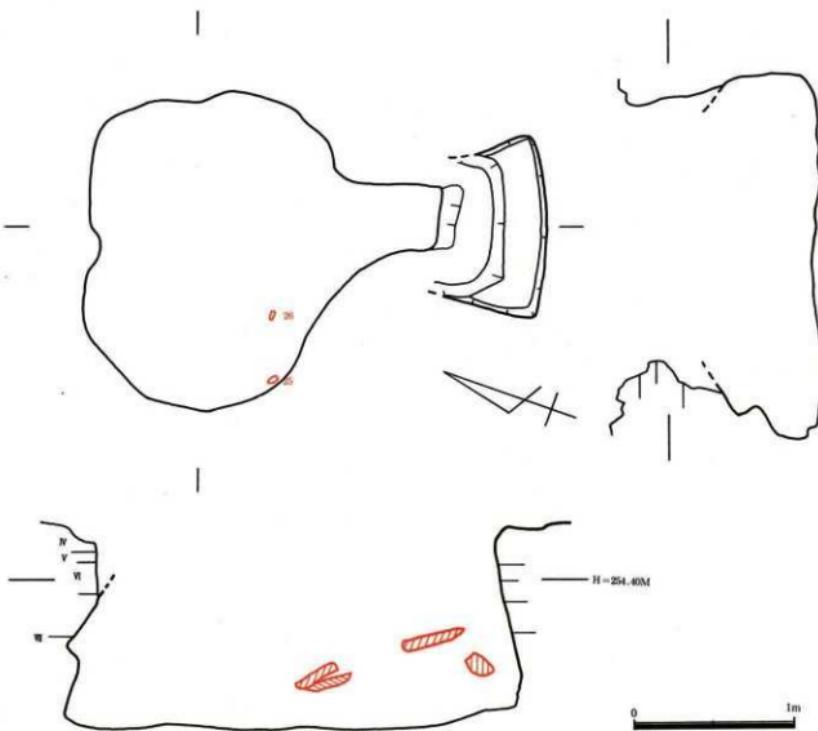
### 地下式横穴墓以外の出土遺物（第28・62図2～7）

全体的に遺物は少なく、S T - 3015～18周辺に古墳時代の土師器片が10点余り、中世～近世の土師器や陶磁器片がII～III層に混入している程度である。

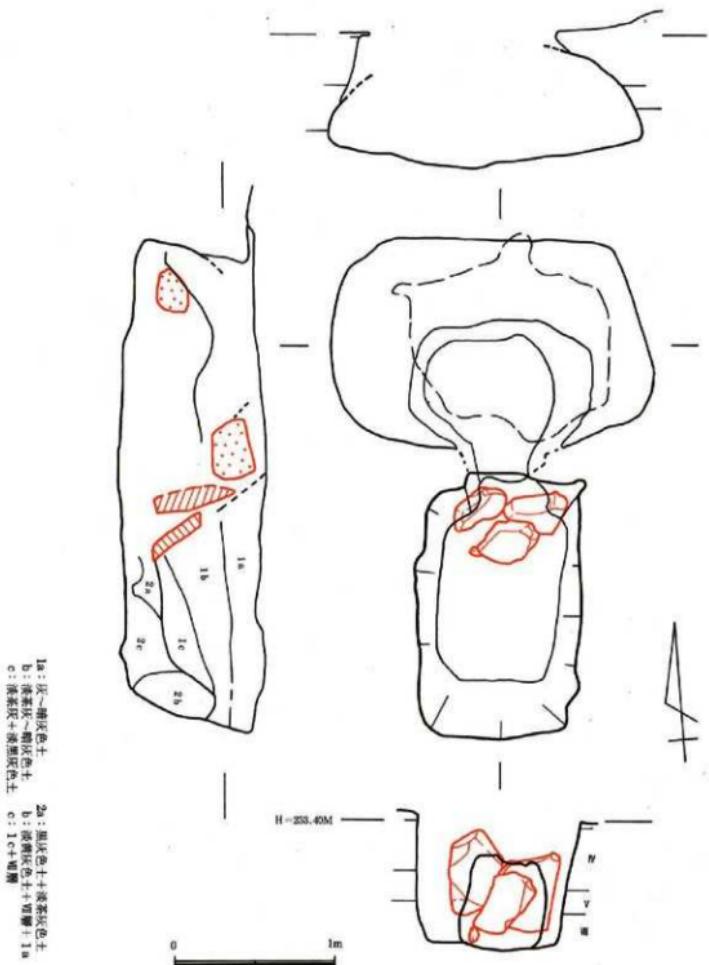
1はS D - 40の北西付近で出土した土師器で、外面はハケ調整で黄褐色、内面はナデで淡黄褐色を呈する。2は、C - 0区のII層から出土した土師器の坏で、糸切底、外面は淡茶褐色、内面は淡桃褐色を呈する。

### 小結

当該地区は、古墳時代には墓域として、平安～中世にかけて開墾が始まり、近世以降は本格的な水稻耕作が始まっている。幅が広く、屈折したり深さも一定でない溝状遺構（S D - 38・40）は中世～近世に掘削されているが、S T - 3009・13・14・20などの地下式横穴墓の墳丘が遺存していたために、排水等の理由で掘削されたと推定される。



第14図 S T - 3009 遺構実測図



第15図 ST-3010 造構実測図

#### 4. 蔿D地区（第30図、31図）

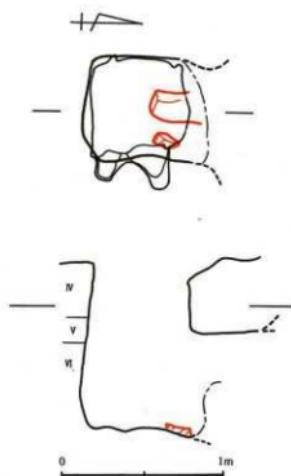
圃場整備において道路と水路が設けられる所であり、地下式横穴墓の存在が予想されたために調査を実施した。対象地は3区に分けて、重機によりIV層（アカホヤ）上面まで削平した。

1区はVI層まで削平されており、遺構面は表土下0.4～0.6mである。北西部では幅40cm内外・深さ5～10cmの溝状遺構を検出した。この溝から北西側は凹地となりIII層（黒色土）が90cm堆積している。東壁沿いの溝状遺構は深さ10cm内外で、彎曲している。

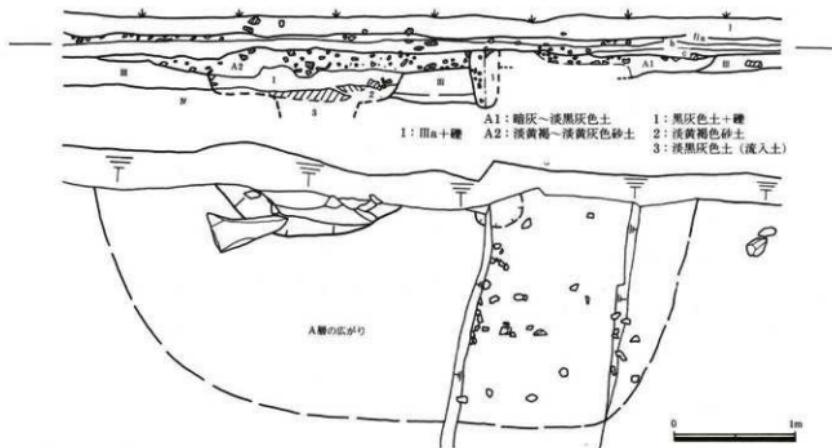
2区の北側には、IV層を掘り出した畦畔1条が、中央部には掘立柱建物跡（S B-01）と推定される柱穴状遺構が検出された。形状は円～椭円形で、直径15～45cm、深さ4～9cmと一様でなく、配列も不完全であるが、簡易小屋程度の建物跡であろうと思われる。

2～3区の東側では、幅3m前後の溝状遺構を検出し一部を調査した。その結果、東肩部は浅い掘り込みで、幅2m、深さ0.7mの本体があり、その東にはIV層削り出しの畦畔（S R）と溝状遺構と推定される掘り込みがあり、畦畔と水路のセットであろうと思われる。

出土遺物は極めて少なく、しかも細片であり、これら遺構の年代が決定できないが中世後半（15世紀前後）であろうと思われる。



第16図 S T - 3011 遺構実測図



第17図 S T - 3012 剥削堆土と北壁層序

## 5. 久見迫B地区

はじめに

試掘溝H 1の調査で地下式横穴墓1基と中世の土塙墓が検出され、I 1～J 2では中世～近世の柱穴や溝状遺構が検出されたため、道路・水路として施工する範囲について発掘調査を実施した。調査区の100m西側では、昭和47年度の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査において、地下式横穴墓が10基確認された。当該地区をA地区とし、昭和63年度調査区をB地区として、以下、報告する。B地区は4区に分けて、西半分を1区、東半分を2～4区とした（第32図）。

### 基本的層序

2～4区の南側は、周辺で一番高い微高地であり、現在、宅地や畠・山林となっている。調査結果も同様で南側の遺構面は高く、後世の開墾によって削平・削失を受けている。旧地形の疊層が盛り上がる凸面がこの微高地

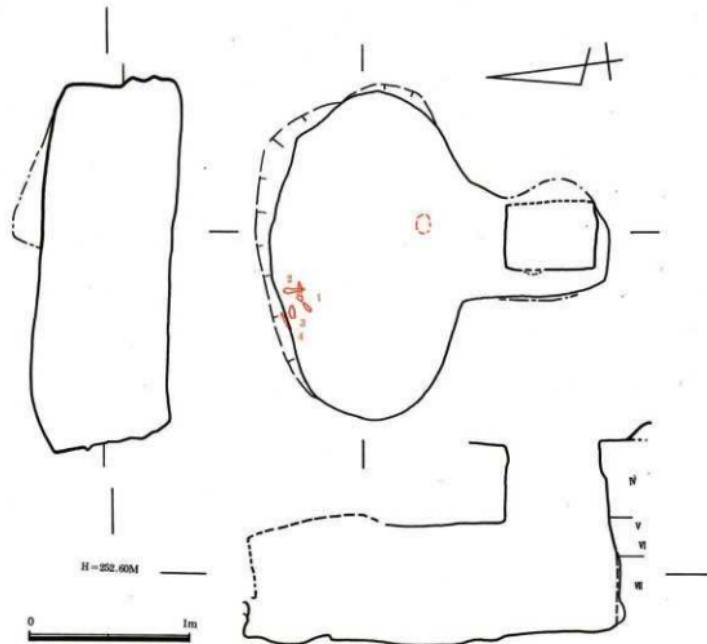
にあたる。基本的層序は、1区は他の地区と変わらず、III層（黒土）の下にIV層（アカホヤ）が一面に現れるが、3区では表土の下は疊層（V層）で、1m近く削平されている。4区では東に向かって基盤が下降している（第33図）。

### 縄文時代の遺構と遺物（第70図、図版45）

4区の南壁において、VI b層から掘り込む柱穴状遺構2基を確認し、VI～VII層内で縄文時代早期の山形・橢円形押型文土器（1～4）を、近世の溜池状遺構（S Z-11）から縄文時代晚期の底部部（5）を検出したのみである。

### 弥生時代の遺構と遺物（第71図、図版45）

遺構は削失しているが、遺物包含層や中世～近世の遺構埋土から免田式土器（1～3）や細片が出土している。器面の摩滅はほとんど無く、付近（微高地）に集落が存在すると思われる。



第18図 ST-3013 遺構実測図

### 古墳時代の遺構と遺物

1～3区において、地下式横穴墓13基（S T -4001～4013）と土塙墓（S K -107, 110）を調査した。当該地区には、中世の遺構が多く、擾乱されている。

#### S T - 4 0 0 1 (第34図、図版24)

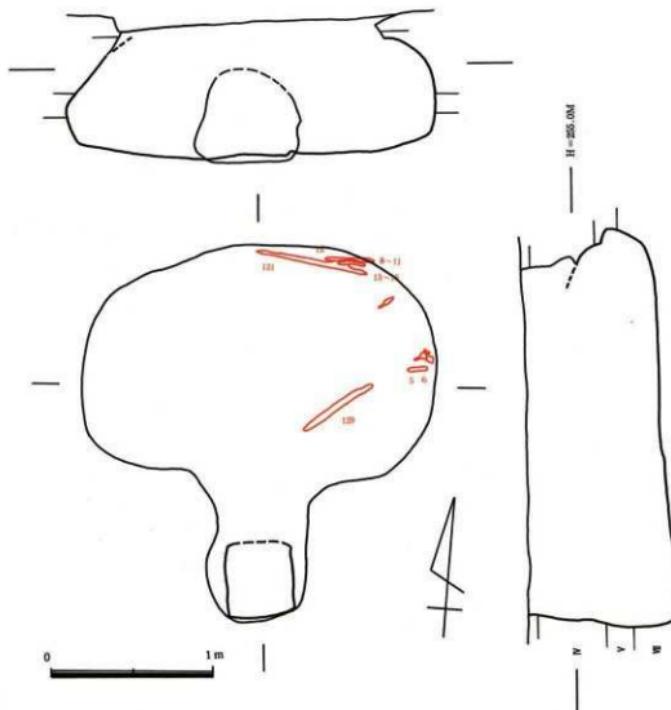
検出時、玄室の右裾部に風倒木痕が重複していたが調査員（筆者）の確認が薄かったために遺構との関係が不明瞭になった。

当墳墓は主軸を北東に向かって、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。風倒木の影響で、玄室の右半分は掘り肩が不明瞭である。断面層序図とて推定すると堅坑は、長さ1.3m前後、幅1.5m、深さ0.6mを測る。羨門にはアカホヤ塊が小量遺存していた。玄室左側は中央に突出部があるものの旧状を保つ。玄室の奥行きは1.4m前後、幅は2.8m前後と推定される。

玄室の奥壁沿いには、床面から30cmのレベルに折れ曲がった大刀1振（第50図-127）が、左側には小刀1と圭頭鐵2、三角形長頸鐵16本が折れて混在した状況であった（第46図-1～20）。大刀の現存長は88cmである。

#### S T - 4 0 0 2 (第35図、図版25)

中世の柱穴に穿たれ、上部50cm程度が削平された、主軸が北寄りの羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。堅坑は長さ1.66m、幅1.32mのD字型を呈し、深さは0.56mで羨門前が一段低い。羨門はアカホヤ塊で閉塞されている。羨道底面は緩やかに上昇し、玄室の床面が高くなる。玄室は奥行き1.35m、幅2.16mを測る。副葬品は3群に分かれ、圭頭鐵3、三角形長頸鐵3、刀子1（第46図-21～27）がみられた。また、奥壁沿い中央部と右裾部には赤色顔料（朱か）がみられ、少なくとも2体の被葬



第19図 S T - 3014 遺構実測図

者が推定できる。

S T - 4 0 0 3 (第36図、図版26)

中世の柱穴に穿たれ、羨道から玄室にかけての天井は崩落し、上部50cm程度が削平されている。主軸は北寄り、羨門閉塞・平入り梢円形タイプである。堅坑は長さ1.5m、幅1.3mのD字型を呈し、深さは0.6mを測る。

玄室の奥行きは1.40m、幅は1.90mを測り、右奥に三角形鎌1、三角形長頭鎌2、刀子2 (第46図-28~32) が副葬されていた。

S T - 4 0 0 4 (第37図、図版27)

羨道部の攪乱が著しく、上部30cm程度の削平を受ける。主軸は北寄り、羨門閉塞・平入り略方形タイプである。堅坑は長さ1.65m、幅1.6~1.7m、深さ0.78mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。玄室はいびつで、左側には50cm程度「側面」としての意識がみられる。奥行き

は1.50m、幅1.70mで、高さは0.40mと極めて低い。

副葬品は多く、大刀1振のほか主頭鎌2、三角形鎌2、脇抜柳葉鎌1、柳葉長頭鎌1、三角形長頭鎌8、三角形片逆刺長頭鎌1、型式不明鎌1、刀子1、小刀1、巻1がある (第47図-33~56、第50図-128)。大刀は鋒を欠き、現存長48.2cmである。

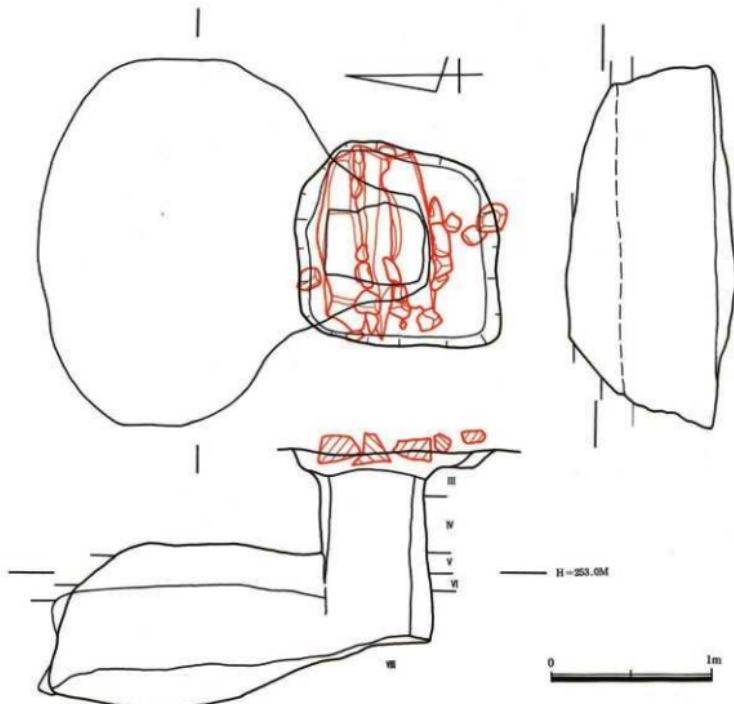
人骨は遺存していないかったが、鐵鎌が3群であることから、被葬者は3人と推定する。

S T - 4 0 0 5 (第38図、図版28)

上部20~30cmが削平され、主軸が北東に屈折する羨門閉塞・平入り梢円形タイプである。

堅坑は長さ1.60m、幅1.2~1.54mの略台形を呈し、深さは1.06mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。玄室は奥行き1.40m、幅2.06mで、羨道よりも若干高い。

副葬品は豊富で、剣1振のほか主頭鎌1、片刃長頭鎌



第20図 S T - 3015 遺構実測図

5、三角形長頸鐵 3、型式不明鐵 1、刀子 1 がある（第48図-64～80、第50図-126）。劍は70.4cmを測る。

人骨は遺存していないが、副葬品の位置から被葬者は2～3人と推定される。

#### ST-4006 (第39図、図版29)

玄室の左側と上部20～30cmを後世に掘削され、天井が崩落していた。主軸は北東で、羨門閉塞・平入り椭円形タイプである。

堅坑は長さ1.7m前後、幅1.6mのD字形を呈し、深さは1.17mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.46m、幅2.4m前後である。奥壁側には赤色顔料があり、片刃長頸鐵 2本と三角形長頸鐵13本、不明 2本の束が、手前には刀子 2と鉄鐵の基部 2が副葬され、刀子 (94) の手前に人骨片が遺存していた（第48図-81～95）。

副葬品の配置から、被葬者は2～3人と推定される。

#### ST-4007 (第40図、図版29)

調査当初は堅坑のみ検出し、調査区外も拡幅して玄室の状況を確認したところ、天井は崩壊して埋没していたので保存することとした。

上部が20cm程度削平され、主軸を南南西にとする羨門閉塞のタイプである。堅坑は長さ1.44m、幅1.34mのD字形を呈し、深さ0.80mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞している。

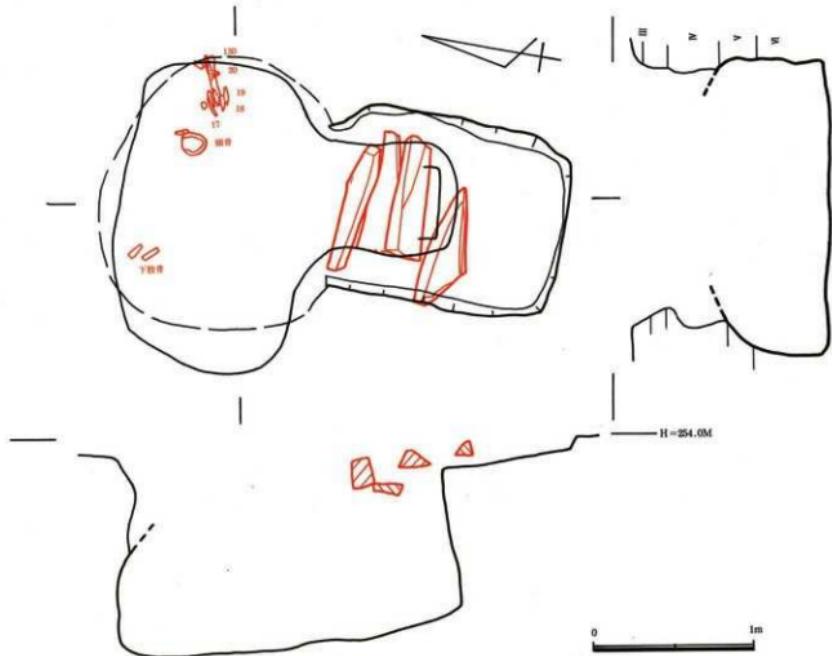
#### ST-4008 (第41図、図版30)

玄室の天井は崩落し埋没していた。主軸は南東寄りで羨門閉塞・平入り椭円形タイプである。

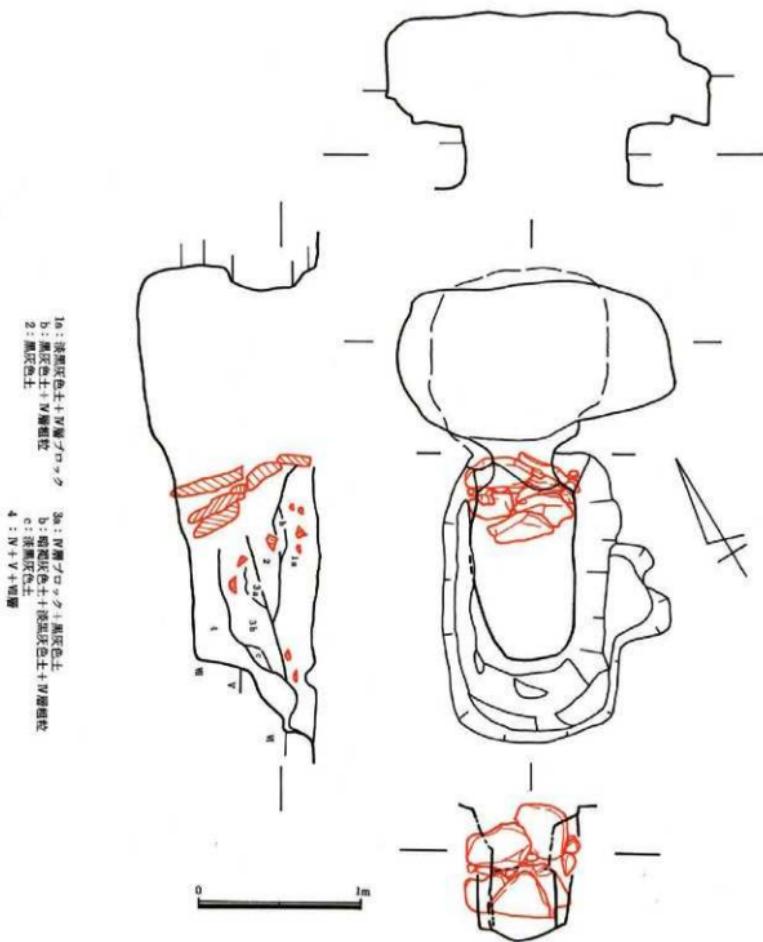
堅坑は長さ1.60m、幅1.40mのD字形を呈し、深さ0.84mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.58m、幅2.30mを測る。左奥は突出し、その手前に柳葉鐵 1と長頸鐵 4、刀子 2が一括して副葬されている（第47図-57～62）

人骨は遺存していない。



第21図 ST-3016 遺構実測図



第22図 ST-3017 遺構実測図

S T - 4 0 0 9 (第42図、図版31・32)

当初は玄室上面周辺に黒色土と焼土が堆積しており、掘り下げたところ、地下式横穴墓であると判明したため土層観察用土手を除去して竪坑まで検出した。

主軸は西向きの、羨門閉塞・平入り梢円形タイプである。竪坑は長さ2m、幅1.7mの隅丸長方形を呈し、深さは1.1mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は1段高くなり、幅2.49m、奥行きは0.8-1.5mの不整形を呈する。中央部には、腸抉柳葉鎌1点のほか三角形鎌1、三角形長頸鎌7、刀子2が一括して副葬されていた(第48図-96~111)。

人骨は、遺存していない。

S T - 4 0 1 0 (第56図左上、図版32)

近世の溜池状造構掘削により竪坑から玄室の半分以上を削失し、残存部も天井が崩落していた。

主軸は北寄りで、玄室の幅は2.2m前後と推定される。左奥にあたるところから片刃鎌1点が出土した(第47図

-63)。人骨は遺存していない。

S T - 4 0 1 1 (第43図、図版33・35下)

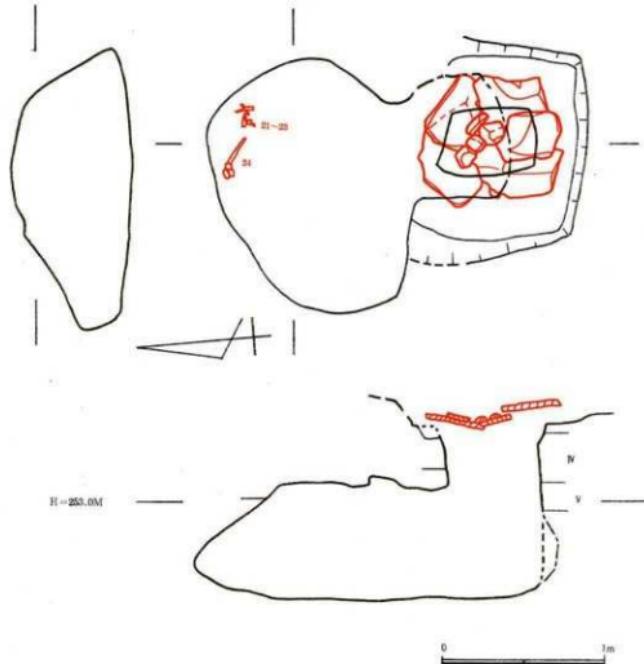
主軸は東南東に向き、玄室は微高地の斜面に位置している。玄室側は上部40cm程度が削平され、天井も崩落していた墳墓で、羨門閉塞・平入り梢円形タイプである。

竪坑は長さ1.88m、幅1.40mのD字形を呈し、3段掘り、最深部の深さは0.94mを測る。羨門はアカホヤ塊と磚で閉塞される。渓道から玄室へは急上昇し渓道の幅も広がる。

玄室は奥行き1.40m、幅2.04mを測る。副葬品は豊富で、小刀1点のほか腸抉柳葉鎌1、三角形鎌1、方頭鎌1、長三角形長頸鎌5、片刃長頸鎌1、形式不明1、轡1がある(第49図-112~125)。また配置状況から、被葬者は2~3人と推定される。

S T - 4 0 1 2 (第44図、図版34)

主軸を北東にむけた、羨門閉塞・平入り梢円形タイプであり、玄室の天井は崩落していた。



第23図 S T - 4018 遺構実測図

堅坑は長さ1.82m、幅1.68mのD字形を呈し、深さは0.88mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.20m、幅2.08mを測る。人骨および副葬品は皆無である。

#### S T - 4 0 1 3 (第45図、図版35)

III層上面から掘り込む堅坑を検出した。羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

堅坑は長さ2.2m、幅1.8mのD字形を呈し、深さは1.18mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は天井が低く（0.3~0.5m）調査が困難であったことから重機で半截した。奥行きは1.34m、幅は約2mである。人骨および副葬品は皆無である。

#### S K - 1 0 7 (第32図、図版36)

3区の西側で検出した、長さ1.2~1.5m、幅0.95mの台形を呈し、深さ0.1mで長軸を東西に向けた土壙墓である。当遺構の検出面はⅣ層（疊層）上面であり、上部約1mが削平されている。

北西隅には轡（第52図-1~3）が副葬されていた。

#### S K - 1 1 0 (第51図、図版37)

長軸がほぼ東西で、長さ1.53m、幅1.16mの楕円形を呈し、深さは0.90mを測る。

底面近くで、轡（第52図-4~5）が出土した。断面層序から、木棺墓の可能性が推定される。

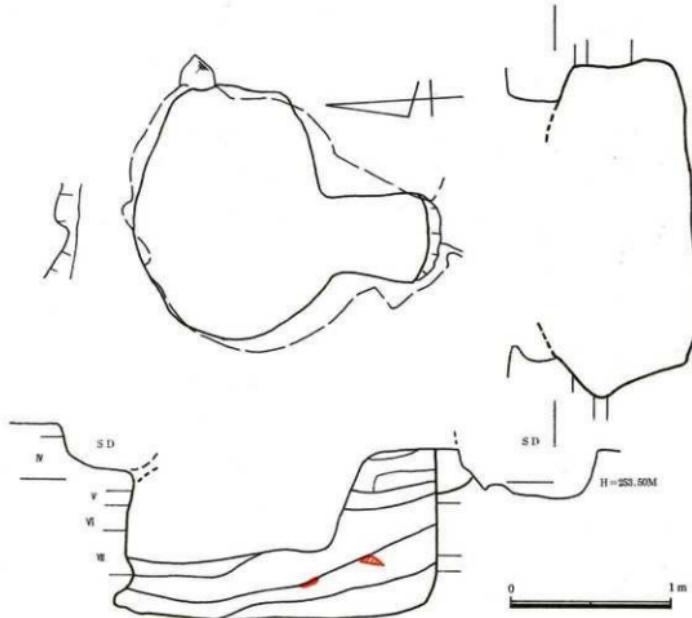
その他古墳時代の遺物

S T - 4 0 1 1 堅坑の西側において、土師器と須恵器が散在していた（第55図、表6）。土師器は壺と甕が多く、須恵器は甕の胴部だけで、破碎された状況でもない。位置的には、S T - 4 0 0 8か4011の埴丘祭祀に用いられた土器であると推定される。

試掘溝Fの西側では須恵器の坏身を表記（第64図-1、表10）し、S Z - 11からは坏蓋（第64図-2）が出土しており、付近の墳墓群の祭祀年代を示している。

中世以降の遺構と遺物

微高地縁辺にある当該地区は、中世になると集落が営まれ、墓域は廃絶される。柱穴は近世末までを含めて約1,000基検出したが、建物の復元にまでは至っていない。



第24図 S T - 3019 遺構実測図